

がまん湊遺跡
(西山中世墓址)

上の山遺跡

発掘調査報告書

1994-3

中野市教育委員会

がまん淵遺跡
(西山中世墓址)

上の山遺跡

発掘調査報告書

1994-3

中野市教育委員会

序

中野市では関越自動車道上越線、オリンピック関連道路などの高速交通網の整備が具体化し、すでに建設工事が進められております。それに伴い、周辺整備も急ピッチで進められております。

本書は、関越自動車道上越線の建設に伴う草間地籍の地滑り防止工事に先だって行われた埋蔵文化財の発掘調査の報告書であります。当市では、でき得る限り現状保存し、後世に伝えていくことを原則として、埋蔵文化財の保護施策を実施しておりますが、ここで報告する二つの遺跡につきましては、文化財保護審議会委員の金井汲次氏、県教育委員会文化課の指導を得ながら、関係者で慎重に協議した結果、緊急発掘調査を実施し、記録保存することになりました。

調査は中野市教育委員会が担当し、調査団を編成して実施しました。その結果、古墳時代末の須恵器窯、中世の墓址群を検出するなど、大きな成果をあげることができ、中野市の歴史に新しい一頁を加えることとなりました。

今回の調査にあたり、ご苦勞頂いた調査団をはじめ、ご指導を頂きました県教育委員会、ご協力を頂いた地元の皆様、関係各位に感謝と御礼を申し上げます。

今後とも当市の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をお願いいたします。

平成6年3月

中野市教育委員会

教育長 小林 治己

目次

草間がまん湖遺跡（西山中世墓址）上の山遺跡発掘調査報告書

序文

- 第1章 発掘調査の経過
 - 第1節 調査にいたる経過
 - 第2節 調査日誌
 - 第3節 調査団の編成
- 第II章 調査地周辺の環境
 - 第1節 遺跡の立地
 - 第2節 歴史的環境
 - 第3節 層序
- 第III章 遺構と遺物
 - 第1節 がまん湖1号竈址
 - (1) 遺構
 - (2) 遺物
 - (3) 小結

- 第2節 西山中世墓址遺跡
 - (1) 位置と発掘の経緯
 - (2) 遺物
- 第3節 考察
 - 小結 西山中世墓址遺跡について
 - 1 遺地について
 - 2 墓地の形成と腐蝕について
 - 3 被葬者の身分と葬法について
 - 4 五輪塔の形式と石材について
- 第IV章 上の山遺跡
 - (1) 遺構
 - (2) 遺物
- あとがき

挿図目次

- 第1図 周辺の遺跡位置図(1)
- 第2図 周辺の遺跡位置図(2)
- 第3図 1号竈址ベント断面図
- 第4図 1号竈址平面・断面図
- 第5図 1号竈址遺物検出図
- 第6図 1号竈址出土土器実測図
- 第7図 1号竈址出土土器拓影図(1)
- 第8図 " (2)
- 第9図 " (3)
- 第10図 1号竈址・西山中世墓址位置図
- 第11図 グビ址実測図
- 第12図 第I群支群2実測図
- 第13図 第II群支群4実測図
- 第14図 第III群支群5実測図
- 第15図 第III群支群7実測図
- 第16図 第III群支群8実測図
- 第17図 第III群支群9実測図
- 第18図 第IV群支群10実測図
- 第19図 第IV群支群11実測図
- 第20図 第IV群支群12実測図
- 第21図 両み石ビット検出図
- 第22図 鹿骨器検出図
- 第23図 第V群支群13実測図
- 第24図 第V群支群14実測図

- 第25図 第V群支群15実測図
- 第26図 第I群支群16実測図
- 第27図 古銭拓影図
- 第28図 刀子・かわらけ実測図
- 第29図 土器実測図
- 第30図 火輪実測図(1)
- 第31図 " (2)
- 第32図 窠・風輪実測図(1)
- 第33図 " (2)組み合わせ五輪塔実測図
- 第34図 水輪実測図(1)
- 第35図 " (2)
- 第36図 地輪実測図(1)
- 第37図 " (2)
- 第38図 石製品実測図
- 第39図 中野市の中世墓間係遺跡位置図
- 第40図 推定牛出本舞寺跡出土五輪塔実測図
- 第41図 がまん湖遺跡探検土器実測図
- 第42図 上の山遺跡位置図
- 第43図 上の山遺跡遺構・遺物実測図
- 第44図 上の山遺跡遺構断面図
- 第45図 上の山遺跡出土土器・実測拓影図
- 付図1 西山中世墓址遺跡全体図
- 付図2 西山中世墓址・火葬骨ビット検出図

表 目 次

第1表	がまん洞1号窟址須惠器観察表	第8表	" (一組)
第2表	がまん洞1号窟址土器拓影図観察表	第9表	" (水輪)
第3表	西山中世墓址遺構・遺物表	第10表	" (地輪)
第4表	西山中世墓址出土古銭表	第11表	石製品計測表 (西山中世墓址)
第5表	西山中世墓址出土道物観察表	第12表	推定牛山本誓寺跡出土五輪塔計測表
第6表	五輪塔数値整理表 (火輪)	第13表	がまん洞遺跡表採土器観察表
第7表	" (風・空輪)	第14表	上の山道跡出土土器実測・拓影図観察表

写 真 目 次

写真1	南方から見たがまん洞遺跡全景	写真28	支群12・土師器の臺の検出
写真2	高速道工事で現われた摺曲の断面	写真29	支群11・珠洲焼の竈とかわらけ
写真3	南から見たがまん洞1号窟址	写真30	支群7・上から見た地輪 (32-1)
写真4	北から見た灰原の土器	写真31	支群2・水輪・地輪・石臼の検出
写真5	西から見た灰原・流成部付近の土器	写真32	支群7・地輪 (32-1) の前の供花台石
写真6	南から見た北側の壁断面	写真33	支群7・石囲みの火葬骨
写真7	南から見た中央部断面	写真34	支群13・空風輪・水輪・火輪
写真8	西から見た中央の横断面	写真35	支群11・空風輪
写真9	東 (灰原) から見た窟址全景	写真36	東から見た支群13の埋葬火葬骨
写真10	坏蓋・坏	写真37	南から見た支群7と11の埋葬火葬骨
写真11	甕破片 (表面)	写真38	想定復元した五輪塔
写真12	同甕破片 (内面)	写真39	竈壺祭
写真13	須惠器破片	写真40	出土した珠洲焼壺・かわらけ・土師器壺
写真14	同内面	写真41	凝灰岩の地輪
写真15	西山中世墓址から見た小布施町方面	写真42	"
写真16	伝電徳寺跡	写真43	出土した五輪塔の部材
写真17	南から見た墓址全景	写真44	想定復元した組み合わせ五輪塔
写真18	西から見た墓址全景	写真45	"
写真19	1号火葬址 (ダビ址)	写真46	"
写真20	2号火葬址 (ダビ址)	写真47	"
写真21	3号火葬址 (ダビ址)	写真48	南から見た上の山道跡調査地全景
写真22	六道銭の検出	写真49	南から見た粘土探掘坑
写真23	刀子の検出	写真50	西から見た粘土探掘坑全景
写真24	支群11	写真51	西から見た粘土探掘坑の東部分
写真25	支群12・地輪 (26-4) ほか	写真52	粘土探掘坑の断面
写真26	支群12・凝灰岩の地輪 (25)	写真53	粘土探掘坑底の土器
写真27	支群11・珠洲焼壺の検出	写真54	"

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査にいたる経過

がまん淵遺跡、草間上の山遺跡は、中野市の西端を囲むように南北に延びる高丘陵陵の南端部に位置する。高丘陵陵は標高350～400m、沖積面からの比高は20～50m、更新世中期の豊野層から構成される比較的解析度の低い丘陵であり、多くの遺跡が確認されている地域である。

この高丘陵陵の南部を東西に横切る形で、上越自動車道が計画され、すでに工事着手され、周辺の整備も急ピッチで進められている。

今回の調査はそうした高速道周辺整備の一環である地滑り防止工事に先だって、行われたものである。

平成3年、地滑り防止工事が計画されたが、当該地域内にがまん淵遺跡、草間上の山遺跡の存在が確認されていた。そこで、事業主体である中野市は県教育委員会文化課及び市文化財保護審議会委員金井汲次氏等の指導をえながら、両遺跡の保護について慎重に検討を進めたが、工事の性格上、記録保存も止むなしと結論するに至った。

そこで、中野市教育委員会では調査団（団長 金井汲次）を編成し、発掘調査を実施することとなった。

第 2 節 調査日誌

がまん淵遺跡・1号窯址・西山中世墓址・上の山遺跡発掘調査日誌

1993年

- 4月26日 作業道の整備、発掘川具置場の設営、雑草、雑木の刈り払い。
- 27日 雑草・雑木の刈り払いの続き。
- 5月8日 雑草・雑木の刈り払いと、清掃作業。
- 11日 先日に同じ作業。
- 12日 同上、全景写真撮影。
- 13日 同上とトランシットによるグリット設定作業。
- 14日 清掃作業。
- 17日 清掃作業、ゴミの焼却。
- 18日 前日に同じ、午後グリット設定。

- 20日 大型バックホーで表土を削ぐ、組み合わせ五輪塔の部材出土。平面測量を行う。
- 21日 草かきなどで表土削り、一輪車、みで土を運び出す。木の根の除去。
- 22日 前日に同じ、午後雨で休み。
- 24日 表土削りと、トレンチを入れる、五輪塔部材出土。
- 25日 須恵器焼成窯に採上の重機が迫ったので、窯址に発掘調査の重点を移す。
- 26日 窯址の表土の除去、写真撮影、ベルトを残して掘り下げる。
- 27日 窯址の掘り下げ、写真撮影、墓址の掘り下げ、下方の宅地造成地に弥生土器の出土がみられたので、遺物採集、写真撮影。
- 28日 墓址の掘り下げ、土運搬。
- 29日 窯址の掘り下げ、写真撮影、遺物実測。墓址掘り下げ、珠洲甕検出。
- 31日 墓址五輪部材写真撮影、窯址掘り下げ、実測図作成。
- 6月1日 下方宅地造成地で住居址らしきものあり、土器片採集。窯址須恵器片レベルとり、墓址掘り下げ、参観者土屋積戻。
- 2日 窯址清掃後写真撮影、墓址東下方掘り下げ、五輪塔部材、石うす出土。
- 3日 窯址遺物レベルとり、墓址前日のところ掘り下げ。
- 4日 窯址掘り下げ、墓址東斜面掘り下げる。下方宅地造成地にて五輪塔部材出土、収集する。墓址は南斜面の上段に段を造成し、火葬骨を埋葬し、河原石が使われている箇所もあり、組み合わせ五輪塔のため散乱しているが、地輪はほぼ現位置を保っていると推定された。
- 5日 昨日の宅地造成地で五輪塔部材収集、墓址の一部で火葬骨出土。
- 6日 窯址実測、宅地造成地で土器出土し採集。住居址らしきもの3基あり。墓址東部分掘り下げ。
- 7日 墓址東部分掘り下げ、小さな河原石、五輪塔の部材の安山岩出土。
- 8日 窯址写真撮影、後実測図、窯址は地山をくりぬいて造られたもので、周囲が窯溶して硬化していた。高丘丘陵の須恵器窯では、古い時期に属することが判明する。宅地造成地で遺物採集、高坏は稻清水期のもの。
- 10日 墓址東部分掘り下げ、窯址掘り下げ、宅地造成地の土器採集。
- 11日 墓址東と西部分掘り下げ、宅地造成地東部分で壺・甕・高坏の破片出土採集。窯址掘り下げ、レベル測量。
- 12日 墓址東西部分掘り下げ、五輪塔部材出土。窯址実測、写真、掘り下げ。
- 14日 墓址東斜面で古銭出土、西部分では五輪塔部材出土。窯址写真撮影、掘り下げ。
- 15日 墓址東西部分掘り下げ、窯址掘り下げ、午後雨で休み。
- 16日 窯址掘り下げ、写真撮影。墓址西部分五輪塔部材出土、火葬骨も出土、五輪塔の形式や埋葬形態などから、16世紀の墓址群と推定された。

- 17日 高速道採土場にあったテントの移動、墓址の中央と西部の掘り下げ。
- 18日 竈址断面図作成、墓址東部分の掘り下げ、五輪塔部材出土。西部分火葬骨出土。
- 21日 竈址断面図作成、墓址排土用U樋で下方に土を落とす。グリットを全面に割り付ける。
- 22日 墓址グリット割り付け続行、西部の掘り下げ、地輪5、水輪1、風輪2出土、残土整理。
- 25日 墓址中央掘り下げ、東部分実測図作成。
- 28日 竈址掘り下げ、平面・断面図作成。ベルトを削平する。墓址東部分実測、地輪、焼土検出。
- 7月1日 竈址レベル・平面実測図作成、土器取り上げ。墓址東部分掘り下げ、火葬骨、河原小石出土、墓域に石が使われているものと、そうでないものあり。
- 2日 竈址レベル測量、遺物取り上げ、潰れた側壁の確定作業。墓址遺構番号入れ、中央部の清掃、写真撮影。
- 6日 墓址中央部掘り下げ、32号墓地輪の周りに河原石を敷く、上に火葬骨点在、(後にその下層からも検出される。)
- 7日 竈址の壁(自然土)焼結厚さ4~5cm。墓址西部分実測、東部分清掃、火葬骨の掘り出し、32号墓地輪の周りに円形に火葬骨検出、断面実測。
- 8日 墓址遠景写真撮影、部分撮影。実測図作成、珠洲甕写真。
- 9日 採土工事のため再度テント移動、墓址実測図作成、遺物レベル測量、一部掘り下げ、刀子出土長さ17cm(但し柄部分欠ける)幅最大1.8cm、竈址壁スサ入り補修のあとあり。
- 10日 墓址31号下層に小河原石(径7~10cm)で囲まれた火葬骨1体分あり、写真撮影、レベル測量。
- 15日 墓址レベル測量続行、珠洲甕(28)西火葬骨碎片多い。遺構実測図、写真撮影を行う。
- 16日 墓址甕(28)の上で焼けた古銭2枚付着して出土、六道銭の伴う時期の墓址と認められる。東部分下方にてダビ場あり、長さ1m幅60cm、石(ロストル用)火葬骨、炭片あり。
- 17日 墓址下層掘り下げ、地層断面実測図、上の山(草間日和山神社上)発掘予定地草刈り。
- 19日 墓址42号墓そばのダビ場検出、長さ1.2m、幅60cm、中央に石4個あり火葬骨、炭片あり、6号墓下層ダビ場長さ1m、幅50cm、北に石3個横並び、中央に1個、南に2個(ロストル用か)、火葬骨炭片あり、西側にも広がってみられた。上の山草刈り続行。

- 20日 墓址下層の火葬骨埋葬箇所の確認、写真撮影、実測図、火葬骨埋葬200箇所近くあり、西部分ベルト断面実測図、ゴミ場3箇所、珠洲甕1、在地土器甕1確認。
- 21日 墓址41号溝の中に火輪などを集めた箇所あり、10時30分から草間竜徳寺宮崎孝明師の読経により、慰霊祭を行う。小古井課長、山口課長補佐、調査団一同出席。火葬骨取り上げ、ベルト断面図作成。上の山遺跡卓刈り。
- 22日 墓址32号地輪前にくぼみ石あり、29号墓小河原石(玉石)下に火葬骨、古銭あり、上段部分には埋納銭の火葬墓見られなく、時期差か、階層差か。
- 23日 墓址火葬骨取り上げ、32号墓西で30cm位の円形の墓壇を掘って小河原石を並べ火葬骨を埋葬、斜面では墓壇を斜めに山際掘って埋葬している。出土火葬骨を歴史民俗資料館に運ぶ、テントを上の上遺跡に移動する。
- 24日 墓址下層の埋葬骨発掘、新たに5箇所あり、若年者と思われる顎に歯が残存していたものもあった。上段でも新たに埋葬骨が発見された。上の山遺跡、住居址と想定してベルトを残して掘り下げる。
- 26日 墓址の上段下層掘り下げ、火葬埋葬骨多い。写真撮影、実測図作成。調査終了、発掘調査機材を乗車位置に運ぶ。

上の山遺跡発掘調査日誌

1993年

- 7月27日 遺構・遺物確認して掘り下げる。1m間隔にトレンチャーの溝跡あり、須恵大甕破片、土器片あり、黒土層落ち込み住居址と確定できず、西山中世墓址出土遺物を歴史民俗資料館に運搬する。
- 28日 1日大型バックホーで昨年度未完了の周辺畑地の試掘を行う。遺構・遺物の検出はできなかった。ほかの作業員は雇民で出土遺物を洗う。
- 29日 遺構・遺物の検討から粘土探掘坑と認定する。黒色土部分掘り下げ。
- 30日 前日に同じ、午後雨降りて雇民で土器を洗う。
- 31日 BM設定、遺跡全体図作成、探掘坑内に土器あり、上にまた黄色粘土で覆われている遺構が見られる。良好な粘土層を求めて掘り込み、他の堆積土を排土して堆積しているものと思われる。ここより西方500mで大形給刃石斧を採集し、この地点の試掘を行う。溝状遺構検出する。西山遺跡とする。
- 8月2日 ベルト写真、遺構実測図作成。西山遺跡の溝長さ9m、幅25cmあり、平安時代の須恵器片あり、高速遺採土事業のため、立ヶ花1・2号古墳の境域確定立ち会い。
- 3日 雨降り、雇民で土器洗い。
- 4日 土器探掘坑の下方に土器片あり、拡張掘り下げる。覆われて埋まっていた。古

墳時代末ころの土器と思われる。

- 5日 バックホーでさらに周囲を拡張する。西山遺跡の表土剥ぎもおこなう。
- 6日 雨、歴民で土器洗いと接合、実測図の整理をおこなう。
- 7日 朝、雨水の汲み出し、粘土探掘坑の実測、西山遺跡の表土剥ぎ、住居址は確認できず。
- 9日 遺跡全景写真撮影、実測図、土器取り上げ。立ヶ花西原遺跡の試掘をおこなう。縄文前期末の土器、古墳時代の土器あり。
- 10日 粘土探掘坑実測図、土器取り上げ、西側拡張掘り広げる。立ヶ花西原遺跡埋蔵文化財保護協議。
- 11日 粘土探掘坑大きな坑となる。壘など埋まっていた。西山遺跡をバックホーで表土剥ぎ、柱穴、土器片もあり、立ヶ花古墳の境界立ち会い、土木業者と確定する。
- 12日 粘土探掘坑に十字トレンチを入れて下層を探る。土層断面図作成。西山遺跡削平作業。
- 17日 十字トレンチに雨水が溜まり、排水作業を行う。半日。
- 18日 粘土探掘坑の断面写真撮影、実測図作成。1層、暗黄色土、10cm、2層、黄色土、20cm、3層、黒色土、20～100cm、4層、暗黄色土鉄分あり、20～30cm、白黄色土（採取粘土層）10～30cm、土器はこの層までにあり。6層、暗黄色土、包含、以上標式タイプ。
- 19日 粘土探掘坑断面実測図、黒土の落ち込みは斑状になって、最低1.5mの深さまでに存在する。古墳時代末から平安時代の土器がみられる。5層と6層の間は斜離する状態を示す。立ヶ花遺跡表土剥ぎ、グリット設定。
- 20日 粘土探掘坑全体図、断面図作成。土器の取り上げ、バックホーによる掘り下げ。立ヶ花遺跡掘り下げ。
- 21日 粘土探掘坑をバックホーで、遺構全体を掘り下げてみる。立ヶ花遺跡掘り下げ、雨のため午後休み。
- 24日 粘土探掘坑の排土作業、出土土器の実測、写真撮影。
- 25日 調査地域全体の写真撮影、調査終了。
- 26日 テント、発掘機材立ヶ花遺跡に移動させる。

1994年

1月17日以降 中野市歴史民俗資料館で出土遺物の整理作業、報告書の作成。

第3節 調査団の編成

調査責任者	小林 治巳	中野市教育委員会教育長
調査団長	金井 汲次	日本考古学協会会員・中野市文化財保護審議会長
調査主任	檀原 長則	日本考古学協会会員
調査員	池田 実男	長野県考古学会会員
事務局	小古井嘉幸	中野市教育委員会社会教育課長
	〃 徳竹 雅之	〃 学芸員

第II章 調査地周辺の環境

第1節 遺跡の立地

善光寺平（長野盆地）のほぼ中央を北流する千曲川は、中野市立ヶ花と豊野町蟹沢にいたると、これまで広がった川が、丘陵を削った段丘地形となる。このため洪水時にはここで滞流して、中野市の夜間瀬川扇状地と、小布施町の松川扇状地の間に形成された延徳低湿地に逆流し、一大湖沼化してきた。しかしいまは堤防の完備と、排水機場の設置によってその害を免れている。

がまん湖遺跡の下には低湿地（氾濫原）からくる篠井川が流れ、眼下には小布施町北部の果樹園や穀倉地帯が広がり、長野盆地が一望できる景勝地である。

中野平西部を南北に走る丘陵の最高所は、比高差が100mである。しかし調査した遺跡地周辺では半減し、この丘陵の西方を千曲川が切断して流れている。

この丘陵は第四紀更新世豊野層（『中野市誌自然編』）で構成され、北側に第四紀鮮新世の原面をのせている。ここは太古から隆起を続けており、千曲川はこれを下刻して流れている。高速道工事でみられたこの丘陵の断面は背斜構造で、褶曲した地層が観察された（写真2）。

遺跡の所在する草間地籍と、立ヶ花地籍の丘陵間は、谷地形となっており、ここに北東からの湧水を集めた川がながれている。そして高速道もこの低地形に、計画されて立ヶ花インターにつながっている。がまん湖遺跡の東は、裾部の幅が300m規模の丘で、南側は急崖をなした地滑り地帯であり、砂防指定地に指定されている。この丘は京塚古墳の所在地の386.2mを最高所として、西に低く象鼻状の地形をなしている。

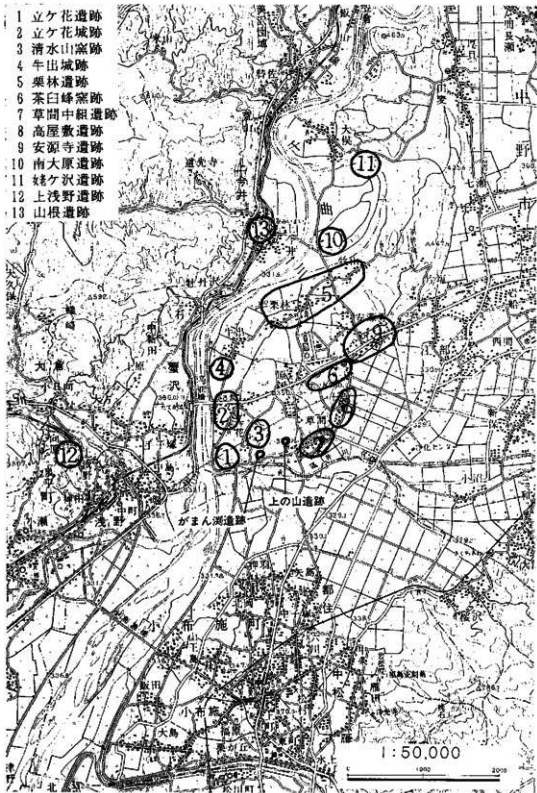
がまん湖遺跡A地点の遺跡は、この先端近くの丘上にあり、高速道用地内は県埋蔵文化財センターで1992年に調査している。ここは標高350m、篠井川面からの比高差は、20mである。B地点はここより北東に80m離れたところで、標高は10m高くなっている。

さらに1号窯址は、50m離れた北東の東南向きの丘上近くの斜面に存在した。

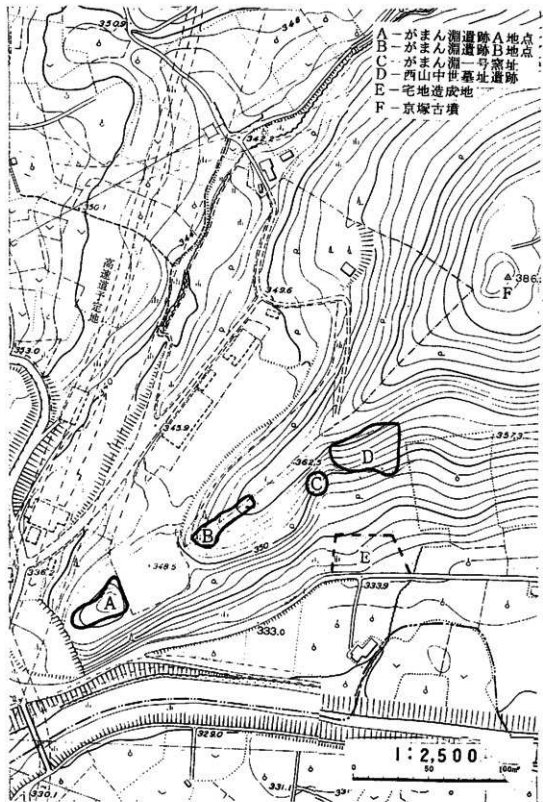
がまん湖遺跡の西山中世墓址群は、さらに北東20mにあり、標高358mから367mにかけた幅40mの位置にある。

上の山遺跡の粘土探掘坑は、この墓址群よりさらに東方400m離れた草間口和山神社の上段に所在した。

これらの遺跡は、地目が山林の中にあり、高速道建設の採土のため、1993年に消滅してしまった。



第1図 周辺の遺跡位置図(1)



第2区 周辺の遺跡位置図(2)

第2節 歴史的環境

高速自動車道^{上信越線}が通過する中野市高丘地区は、原始・古代からの遺跡の宝庫であって、旧石器時代後期の遺跡が浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡、立ヶ花遺跡などにあり、これらは豊野層上の草間面からの発見である。しかし高速自動車道の調査によって原面からも検出されている。

縄文時代の遺跡は各時期に亘って存在し、前期・中期は小規模であり、後期の遺跡は、氾濫原に面した位置にあり、栗林遺跡では、深く埋没した貯蔵穴などが発見されている。

弥生時代は中期後半から遺跡がみられ、栗林遺跡は著名である。これは在地の伝統を残しつつ、東日本の弥生文化の影響がみられるものである。1992年の市教委の調査で漆の中から良好な土器資料が検出されている。また安源寺遺跡は弥生後期から古墳時代前期、平安時代の遺物・遺構が多くみられ、古墳時代初めの北陸をはじめ、各地との交流を示す土器は注目されている。

この台地には隆起の褶曲による丘が多くあり、良好な粘土を産することから、土器の製作に適していた。これは原始・古代からこの粘土採取は行われていたと、推定されるが、ここに竈窯を造り、須恵器を焼いたのは、古墳時代後期のことで、この報告書のがまん洞1号窯址は、この台地の最古期のものである。

この窯業は平安時代まで続き、各地に数十箇所の窯址を残しており、92年の立ヶ花インター予定地の清水山窯址からは「作玖郡」「高川」などと刻された須恵器が発見されている。

このように栄えた窯業も中世には継続せず、素焼きの土器類が僅かに焼かれていた可能性がある。中世前期は、この台地は中野御牧の一部と推定され、この台地に牧人として入ってきたのが、草間氏と推定される。平安時代に筑摩郡の草茂庄によった草間氏との関係は分からないが、この高井郡の草間氏は、佐久方面からきた土豪では、なかろうかとの説がある。

この草間氏は、北信濃の豪族、高梨氏とともに、応永7(1400)年信濃の新守護に任命され、京より着任した小笠原長秀に反抗して、村上満信・高梨朝高(友尊)らを手頭(こどほら)に大文字・檜と連合して戦った。この大塔合戦の物語に出てくるこの地方の領主は、「摘子椋原(高梨)次郎・次男上条介四郎・江部山城・草間大蔵・木島・吉田・菅間をはじめとして……」と書かれている。このころの草間氏の館は、字「大久保」にあったと推定されている。

この時代の高梨氏の本拠地は、『諏訪御符礼之古書』(『諏訪大社文書I』)によると、東条庄椋原にあり、この推定地は、小布施町北部と推定されている。またこの諏訪神社に奉仕する地名に、奥矢島があり、この奥とは佐久郡南牧村の矢島と区別するもので、この矢嶋

氏は、佐久を本貫地としている。

この矢島(氏)の集落は、当時この西山中世墓址の南にあり、篠井川のほとりにいまも神社だけが残されている。後年に水害のため、現在の小布施町都住の矢島に退去したと伝えられている。

この奥郡矢島は嘉暦4(元徳元・1329)年、寛正2(1461)年、文正2(応仁元・1467)年、文明5(1473)年などの『諏訪御符礼古書』に度々現れ、この矢島氏は須田氏の一族とみられている。またこの「諏訪大社文書」の文明4年の「御射山明年御射山定」に、中村郷(木島平村)の高梨宮内少輔は、「(前略)神長祈禱分と心得、御頭何時にても我任心可当候と、約束候て、直納神長方へ料足被渡候。其芳志分に、五貫宛取候。兩奉行へ分て進候。此年高梨宮内少輔老母死去候間、中村郷御頭にて候間、葬候所賀候。(後略)」

このようにこの時代の人は、諏訪神社を崇拜御仕するためにさわりとなる、けがれを除くため、他所に埋葬地を買い求めている。

この高梨本郷家が、先住の中野氏などを追って、中野小館に館を構えたのは永正10(1513)年前後といわれている。これは政盛の代で、永正7年には、越後の長尾為景に協力して、魚沼郡の長森原で山内顕定を撃ち取っている。

このような高梨氏の押領と、拡張に危機を感じた、中野氏の浪人・被官や、小国人の夜交景岡・小島高盛らが、結んで決起した。これは越後の実権を握った、守護代の為景と、守護上杉定実の争いに乗じて、為景方の高梨氏に反抗するが、重臣の草間大炊助に機先を制せられ、小島・夜交氏らを山ぶみしてとらえ、磔にした。このとき中野氏も滅亡したものとみられる。

甲斐の武田氏は天文9(1540)年には佐久郡に進攻し、信濃攻略が本格化した。そして次第に諏訪から松本平方面に攻め入り、19(1550)年に武田晴信は府中(松本)を攻略、信濃守護職小笠原長時の本城、林城も破った。このため、安曇郡中塔城に立て籠もっていた長時は、「21年12月晦日、ここを出て近習ばかり連れて、河中島草間までお退きなされ、中塔に残った人々も翌月16日に、ここを出て草間に参り、長時公のお供をして、越後へ罷り越し、景虎公を御頼み、越後へお入り、2年御座候へども云々」と「二木家記」に記されている。

どんな縁故で長時が、草間氏を頼ったか分からないが、この時の館は、草間字堀にある居館跡と推定される。このように草間氏が久保館から、この平地に移った時期ははっきりしないが、延徳低湿地の干拓が進んだ結果との見解もある。

その後22(1553)年4月、第1回の川中島の甲越の戦いから始まって、次第に武田方に侵食され、高梨氏も飯山城に退去し、ついに越後上杉氏の客将となり、草間氏もこれに従った。その後約30年間は信濃は武田氏の領国支配をうけた。

天正10(1582)年織田氏のために武田氏は滅亡し、高梨氏は故郷に帰るが、それもつか

の間、慶長3(1598)年秀吉の命により、上杉氏は会津に国替えとなり、高梨氏など信濃の諸士は、これに従って先祖の地を後にして去って行った。

慶長5(1600)年徳川家康は、森右近忠政を川中島四郡に移封し、7年に検地を行った。この「川中島四郡検地打立之帳」によれば、草間村は313石6斗7升3合となっている。飯山の松平忠頼領になったのは、寛永16(1639)年でこの間の治世がよく、延宝7(1679)年の検地高は、1,108石3斗1升3合と、開発が進んだ様子である。

この時の検地の字名で、今回の調査と関連のありそうなものをあげると、堀・経塚・五里原・大久保・茶臼峰などである。

明治17(1884)年成立の「長野県町村誌」によれば、「古代は「小内郷」で中世は、栢原庄六川郷大久保村といい、日和ヶ丘北方に村落があった。天正元(1573)年今の地にうつり、草間村と称した。

〔染池〕1間四方にて字屋敷添にあり、この水常に湧出し、その色墨色に類似し、糸類をこれに浸せば、黒色・茶色、樺色などに染色する。故に村人は勿論四隣の人輻輳して糸類を染める。〔竜徳寺〕東西28間3尺、南北11間1尺8寸、面積1反1畝20歩、曹洞宗大徳寺(本郡片塩村)の末派なり、本村の西にあり、当寺応永11年甲申、本村の城主草間豊後守信良、寺一字を創建し、武蔵国比企郡平村靈山院十世僧宗久を招請し開基とし、応永山竜徳寺と号し、巨麗の禪刹をなす。永禄2年己未3月、草間氏落城の際兵火に罹る。後寺跡廃れたるを大正2年甲戌九世僧宗祝更に本村字道添に寺域を移し(中略)〔古城址〕本村の西、字堀にあり、東西47間、南北28間、回字形をなし、平地より高さ1丈許り四面遼濠あり、今は残らず民田となる。然れども其遺跡顕然として里俗称して草間城と云ふ。筑城年月不詳、里俗伝に応永の始め、御館城(在址本郡中野町)主高梨氏の幕下草間次郎(後豊後守)信良居城す。同27年庚子より其子草間加賀守信資、応仁2年戊子より其子草間志摩守信良、永正3年丙寅より其子草間伊豆守信俊、天文7年戊戌より其子草間主殿之助淨養等襲て之に居す。永禄2年己未3月武田氏兵を挙て高梨政頼を略す。此時当城も陥られ、淨養、政頼に従ひ越後に逃れ上杉景虎に拠る。尋て長尾政景の物頭となる。武田氏本城を攻むる際本村にある烽火台及び当城に火を放つ、城郭灰燼となる。以降廃城たり。〔烽火台址〕本村の東、日和ヶ丘上字茶臼山峯にあり。東西20間、南北15間、五稜形をなす。遺壘等依然として猶存す。今に至り近傍を耕耘する者、往々鎌(いしづき)或は鍬、鐵等土砂蝕入したるを得るあり。(ここは1973年に発掘調査されている。文献参照)〔宗源寺跡〕東西50間、本村の北にあり。創建年暦不詳。真言宗古時大寺と見ゆ。残礎の大石今に存す。其傍に蓮池の遺址あり。文政年間此池址より蓮根の古きを掘るあり。又少し北に古骨見ゆることあり。今は田畠となり、民有となる。』

以上今日の研究からすると、疑問に思われることも多いが、参考として引用した。

また調査地の西端の丘陵先端に立ヶ花城址があり、その一部を送電線鉄塔建設工事のた

め、1980年と86年に市教委で調査している。

この西下が大正14(1925)年下流800mに鉄橋が新設されるまで、渡舟場として、中野地方の西の玄関口として、賑わっていた。

1993年高速自動車道立ヶ花インター建設のための市教委の発掘調査で、立ヶ花地籍の清水山で、鎌倉末期から室町時代の遺跡と見られる、中世墓址群が調査された。その内容は、別の報告書で、報告される予定である。

(注) 竜徳寺跡は西山中世墓址から東方100m、草間氏館は同170m、京塚古墳は尾根つづき東北に130m、茶臼峯岩址は同1,200m、立ヶ花城址は西方600m、清水山中世墓址は北西方350mの位置である。

第3節 層序

長野県北部は新生代第3紀・中新生(約3500万年前)にできたフォッサ・マグナ(糸魚川～静岡構造線)の一部に属する。この地溝帯は、その後火山活動などで隆起を続け、陸化するとともに、第4紀(約200万年前)の火山活動などによって、東部山地の山々は次第に現在の姿になった。

千曲川の立ヶ花から古牧までの約14kmには河岸段丘が残されている。これは流路がきまってから、途中が隆起するために起こった現象である。

がまん淵遺跡は、この千曲川右岸の高丘・長丘丘陵(西部丘陵)の南端にあって、その上部は粘土質土におおわれている。この丘陵地域に分布する地層は、下位より大川層・屈敷層・豊野層・平出層である。

この隆起した河岸段丘は高位より、赤壇面・長丘面・草間面・原面・栗林面の5段に区別されている(中野市誌自然編 1981)。がまん淵遺跡は、標高340～350mで、この草間面に区別されている。

この長丘面と草間面からは、後期旧石器時代の石器が浜津ヶ池・安源寺・立ヶ花表遺跡などから発見され、原面からも1993年における県埋文センターの高速道発掘調査で検出されている。

この遺跡の調査地の堆積層は、1 表土、2 褐色土(黒褐色土)、3 黄色土、地山となっており、丘陵は地殻変動の褶曲によって、つくられたものである。東または南面は、傾斜がきつく、地滑り地帯である。

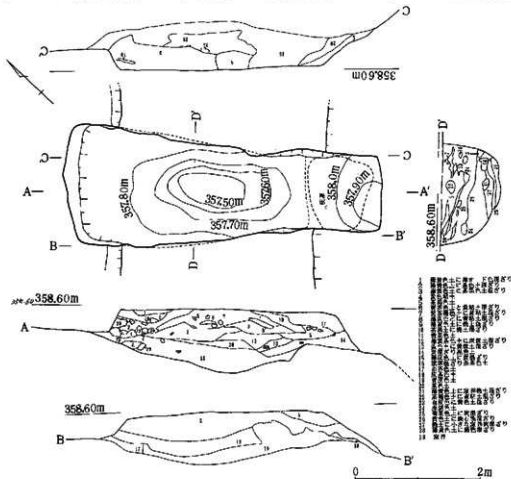
第三章 遺備と遺物

第1節 がまん洞1号窯址

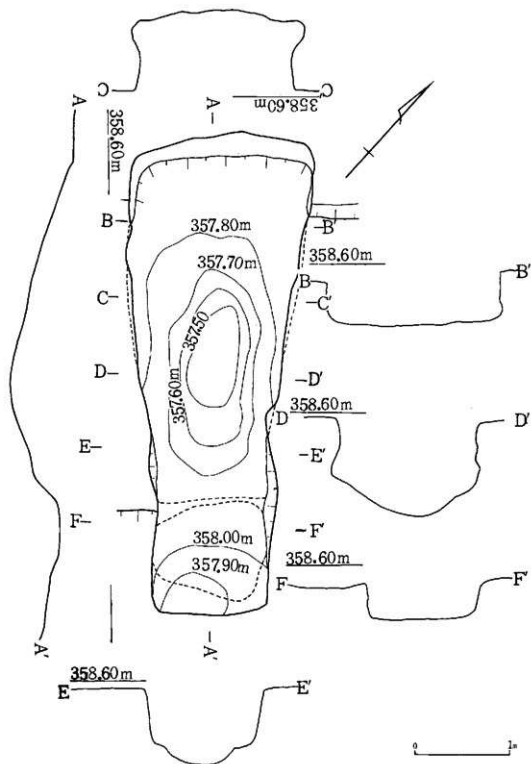
(1) 遺構 (地下式無階無段窖窯)

がまん洞1号窯址は、南西に向かって漸減する尾根の南東側にあつて、丘上から3m下の傾斜角30°の斜面に存在した。発見は高速道造成の採土工事によってである。従つて排煙部などの窯の上部は破壊されてしまった。

この窯は窖窯であつて、自然の粘土堆積層を選んで、窖(トンネル)を掘つて窯にしていた。このため窯壁は火熱のため、白色粘土が化学変化をおこして、3~5cm堅く硬化した。



第3図 1号窯址ベルト断面図



第4图 1号测井平面·断面图

て表面が熔融して滑らかになっていた。またスサ入りの補修と思われる塊も僅か発見されている。

犬井は、ほぼ陥落しており、窯内は硬く締まって、発掘が困難であった。灰原部分は長さ70cm確認され、傾斜角は15°で、後は傾斜面に連なっていた。燃焼部は水平で、70cmを測り、両壁は硬く焼けていた。焼成部は、ここから内側へ1.2mの長さで15°傾斜して下がり、ここから2.5mは15°の角度で立ち上がっていた。

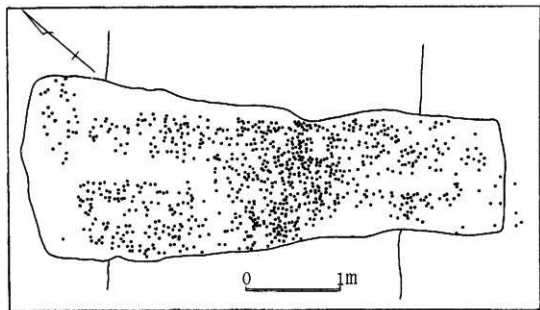
窯の規模は、長さ4.2m前後で、横幅は焼成部で1.25m、焼成部の中辺で1.6m、奥壁で1.8mで、高さは最深部では1mと推定される。

窯は数回使用されたと思われる、焼成台にされた土器に、窯壁が溶けて付着しており、二次焼成をうけた土器が、かなり見受けられた。

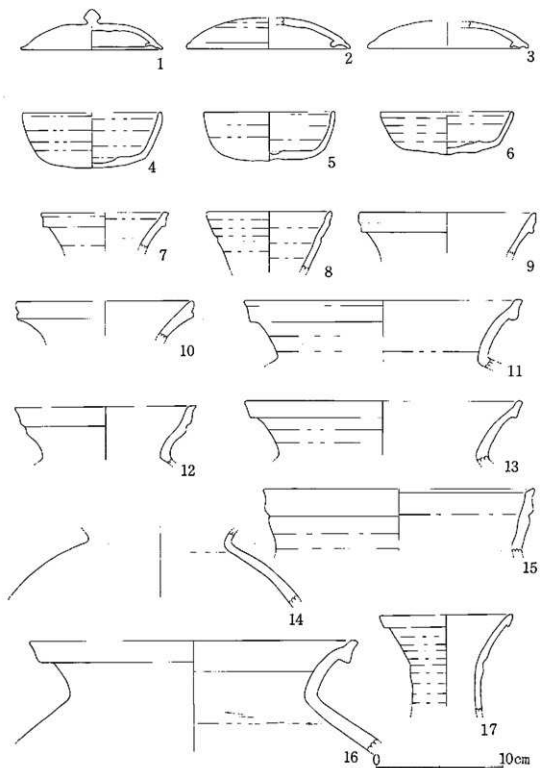
(2) 遺物

1 蓋環 (図6・1～3) は天井に断面菱形の宝珠つまみがみられ、内面「かえり」があり、その先端は尖っているが、端部よりは低い。かなり高温で焼かれて、窯体澤が僅か付着している。3は1よりやや大ぶりで、胎土・焼成・形態は同じである。2は前者より焼成硬度が柔らかく、表面はへら削りされており、「かえり」の先端はゆるやかである。

2 環 (同図4～6) いずれも底部がへらで、台から切り離され、その痕跡の見られるものがある (同図5)。その後へらで底部が整形されている。内面底の中央 (見こみ) が円く凹んでおり、口縁端部が内側からロクロなでされている。



第5図 1号窯址遺物検出図



第6区 1号遗址出土土器特写图

第1表 がまん洞1号窯址須恵器観察表

番号	器形	寸法 (cm)			色		成形・調整	形態の特徴	系統など	残存
		口径	口径	器高	内面	外面				
6-1	杯蓋		11.2	3.2	青灰色	灰白-青灰色	ロクロ成形	宝珠形つまみ 壺敷	上に灰釉	内部の字状のもり とりはほぼ 完
6-2	"	13.0	—	—	青灰色	青灰色	ロクロ成形	フマミ		1/4
6-3	"		—	12.6	セピア色	青灰-白灰色	ロクロ成形	宝珠つまみ欠落	蓋附付者	2/5
6-4	杯	11.2	8.0	4.4	青灰色	青灰色	ロクロナデ 底ヘラ切り			1/2強
6-5	"	10.4	5.3	3.8	青灰色	青灰色 セピア色	ロクロナデ 底ヘラ切り			1/2
6-6	"	10.4(楕)	7.5	3.4	青灰色	青灰色	ロクロナデ 底ヘラ切り			2/5
6-7	盥	10.0	—	—	青灰色	青灰色	内外ロクロ			口縁 1/6
6-8	横蓋	10.0(楕)			青灰色	青灰色		口縁のみ	黒釉付者	口縁 1/6
6-9	壺	14.0			青灰色	白灰色 セピア色			内外窯附付者	口縁 1/4
6-10	"	14.0(楕)			青灰色	白灰色				口縁 1/4
6-11	壺	22.0			青灰色	青灰色				口縁 1/4
6-12	壺	14.4			白灰色	白灰色	ロクロ			口縁 1/4
6-13	壺	21.0(楕)			青灰色 白灰色	青灰色 白灰色	ロクロ			口縁 1/4
6-14	壺	—			青灰色	白灰色		内 車輪文	黒釉付者ロクロ	口縁 1/7
6-15	壺	21.4(楕)	—	—	青灰色 白灰色	白灰色 白灰色			空輪付者	口縁 1/3
6-16	壺	26.0(楕)			青灰色	白色	内部に敲打痕あり			口縁 1/6
6-17	鉢蓋	10.6			青灰色	青灰色 青灰色				口縁 1/2

3 壺 (はそう) (同図7) 口縁部の破片のみである。外面の口縁下に「かえり」のある段が付けられている。

4 横瓶 (同図8) 口縁部の破片で、口縁下に凹線がある。3・4は推定した器種である。窯滓の付着のため、図示しないものもある。

5 壺 (同図9・10) 口縁部下に段があり、外反した器形で口縁端部は円くなっている。これも推定した器形である。

6 長頸壺 (同図17) 台付かどうかは不明である。これも口縁外面に「かえり」のある段があり、その内部には、窯体滓が付着している。上向きで焼かれたことが分かる。かなり手なれた成型である。

7 壺 (同図12・15) これも破片のため、器種の同定が困難である。図示とは逆に器台になる可能性もある。口縁下に凹線があり、口縁端部が斜めに内側に傾斜している。

8 甕 (同図11・13・16) いずれも口縁外面に段があり、やや「かえり」のみられる16などがある。外面と内面頸部まではロクロなどでされ、胴部内面は車輪状の敲打痕が顕著にみられるものである。

図示した拓影図(第7～9図)は、ほとんど壺と甕の破片である。内面の当て板痕跡・車輪文は、直径4.5～5cmの同芯状で、芯があり、円が5輪ほどである(1・4・6～12・14～19・21・23～25・27)。この痕跡が見られないものは、24の壺胴部破片などである。

この中で特殊のものは、20で内部の当て具の車輪文の輪が、歯車状を呈する。この車輪文は芯があり6輪で、直径5cmほどの大きさである。この表面は平行の敲打痕が斜状などに交差してみられる。これらの表面には、敲打痕の上にハケでなでられたものが多く見られる(1・5・19・21など)。

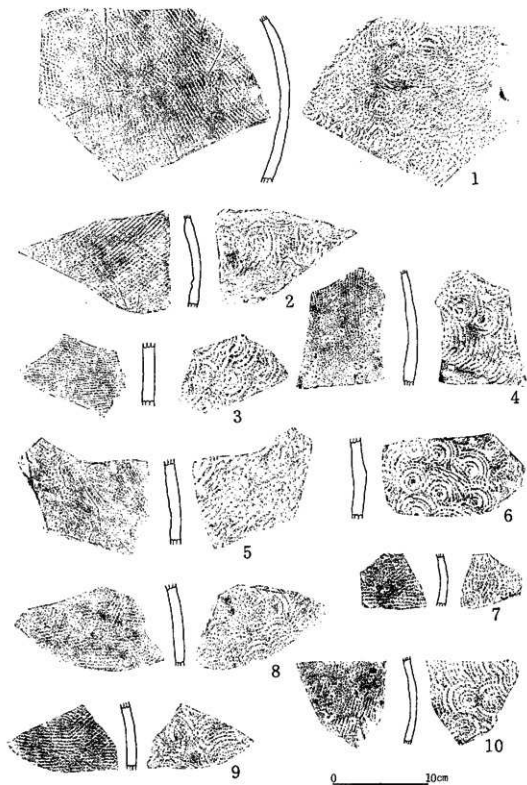
構描波状文のえられるものは、13・15で13は、5本の櫛歯状の工具で描かれ、波状文と列点状の文様が見られ、器形は壺と推定される。15は壺の口縁部破片で、4本の櫛歯状の工具で描かれている。

(3) 小 結

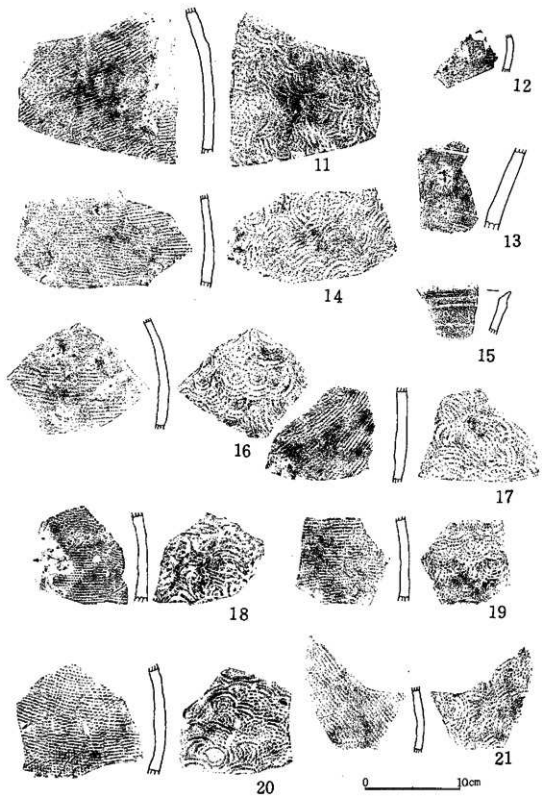
いままで記したように、この窯址は、自然の粘土層に掘りこんだ状態で窰として使用され、横幅の割に、長さの短いものであった。このためか、窯体が高熱で溶解して土器に付着しており、この付着と流れによって、須恵が焼かれる状態(上下)が判明した。このような窯体部分の付着した状態の土器は、図示したほかにも多く見られた。

器種では、大形の壺・甕が量的に多く、坏などの器形の小さなものは、少ない傾向であった。

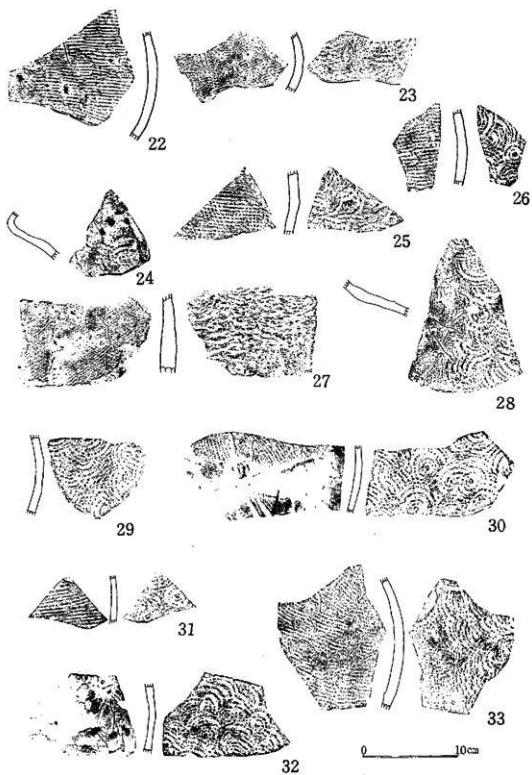
宝珠つまみのある蓋環が出土した窯址は、この高丘丘陵では、茶臼峯9号窯址である。ここの出土品は、古墳時代V期古段階・7世紀後半の第3四半期のころの所産とされている(『長野県史考古資料編全一卷』菅沢 1988)。この9号窯址は、遺物の採集のみで、窯



第7图 | 号寨址出土土器拓影图(1)



第8图 1号墓址出土土器拓影图(2)



第9图 1号窖址出土土器拓影图(3)

第2表 かまん洞1号窯址土器拓影図観察表

図版 番号	器種 (推定)	手法上の特徴		文 様	色		備 考
		外 面	内 面		外	内	
7-1	甕	タタキメ	当て具痕・車輪文		青灰色	青灰色	
7-2	"	"	"		セピア色	"	
7-3	"	"	"		青灰色	セピア色	
7-4	"	ハケメ	当て具痕・大輪		セピア色	"	
7-5	"	タタキメ	"		"	"	
7-6	"	不明	"		青灰色	"	
7-7	壺	タタキメ	当て具痕・車輪文		"	青灰色	
7-8	甕	"	"		"	"	
7-9	"	ハケメ	"		セピア色	"	
7-10	壺	"	"		灰白~青灰色	セピア色	
8-11	甕	"	"		青灰色	青灰色	
8-12	"	"	"		"	"	
8-13	"	"	ロクロナデ	襷描波状文 列点文	セピア色	青灰色 セピア色	
8-14	"	タタキメ	当て具痕・車輪文		青灰色	青灰色	
8-15	"	ハケメ ロクロナデ	ロクロナデ	襷描波状文	セピア色	セピア色	
8-16	"	タタキメ	当て具痕・車輪文		青灰色 白灰色	青灰色	
8-17	"	"	"		青灰色	青灰色	
8-18	"	"	1輪文	"	"	"	
8-19	"	"	"		"	"	
8-20	"	ハケメ タタキメ	特徴あり		"	"	
8-21	壺	"	"		"	"	
9-22	"	"	ナデ		白灰色 セピア色	"	
9-23	甕	" ハケメ	当て具痕・車輪文		セピア色	セピア色	
9-24	壺	不明	"		白灰色	青灰色	
9-25	甕	タタキメ	"		青灰色 セピア色	白灰、青灰	
9-26	"	タタキメ ハケメ	当て具痕・車輪文		白青灰色	黒色	
9-27	"	"	"		黒色 セピア色	セピア色	
9-28	"	不明	ロクロナデ 当て具痕・車輪文		白灰色	青灰色	
9-29	"	タタキメ	当て具痕・車輪文		黒色、白灰色	セピア色	
9-30	壺	タタキメ ロクロナデ	"		白灰色青灰色	青灰色	
9-31	"	タタキメ	"		暗青灰色	青灰色	
9-32	甕	"	"		"	"	
9-33	"	"	"		セピア色	セピア色	

体の構造は、破壊のため良く把握されていない。このためこの丘陵で、当該期の地下式無階無段竈窯址が不完全ながらも、記録されたことは、この丘陵の開窯の問題に迫る資料といえる。

この断面菱形の宝珠つまみの蓋環は、陶邑編年では、Ⅲ型式1段階に出現し（中村1981）、このつまみの消長と法量によって、編年の指標とされている。

大化の新政（646）以後中央集権がさらに整備され、国の下に郡が置かれ、郡衙がつくられた。高井郡衙の所在地は、いまだ定説をみないが、その中に五つの郷（穂科・小内・日野・神戸・稲向）があったことが知られている。このうち小内郷の範囲は、窯址群の所在する高丘台地が含まれる説がある。このように律令体制の強化される中で、この窯址群の開窯に迫る問題は、組織・体制にかかわる工人の動きなどが、関心がもたれることがらである。

この時期の須恵器にみられる表面のたたき目や、内面の当て板底跡は、車輪文（輪花文）と、総称されるように特徴的である。報告したとおり、特異な車輪文もあり（写真12）、これらを追求することによって、工人の移動や、生産地と消費地の対応関係を知ることができる（横山浩一「須恵器にみえる車輪文叩き目の起源」【九州文化史研究所紀要】）。

このように工具と、工具相互の対応関係を、細かく認定することで、その生産規模や、工人組織、協業の形態など分析され、小地域での流通関係を明確にする（西口寿生「土器の産地と交流」【新版古代の日本】10「古代資料研究の方法」1993）。

この蓋環に限ってみても、二つの型式がある。これは恐らく時間差を示すものと考えられるが、この時間差はどのくらいなのか、窯の存続年と絡めた問題である。またこの窯址のみで、断定できる問題ではないが、消費者の需要は、大形の壺・甕などの容器に求められ、この反映が製品の出上量に、現れているとも考えられる。

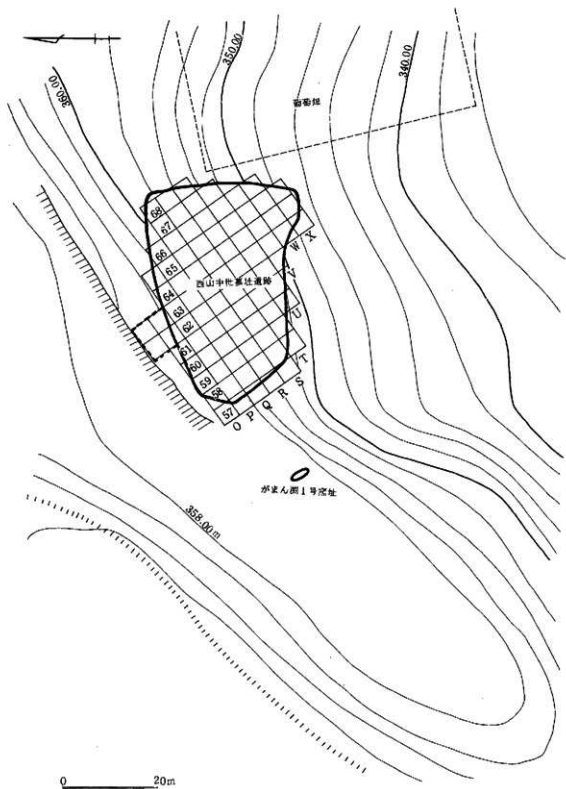
いずれにしてもこの丘陵の始源に、位置するこの窯址は、奈良・平安時代と、連続する窯址群のさきがけをなすもので、この高丘窯業遺跡の発展・展開を探るキー・ポイントをにぎるものと思われる。

第2節 西山中世墓址遺跡

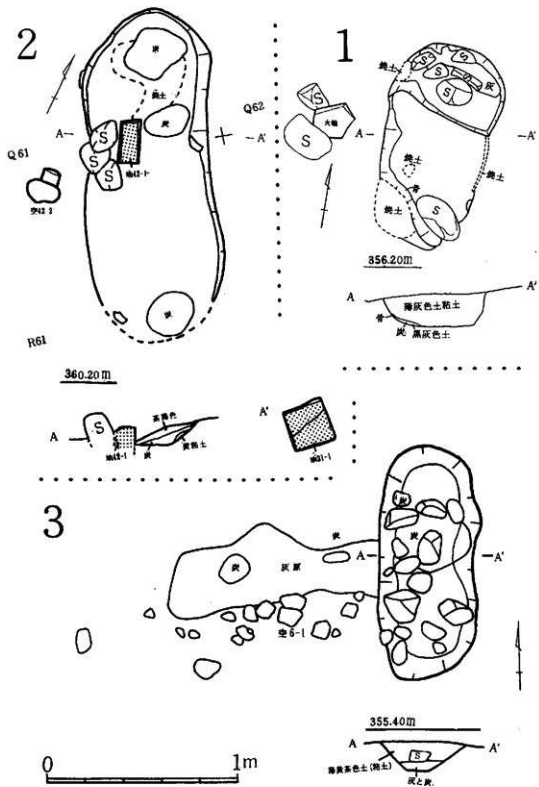
(1) 位置と発掘の端緒

西山中世墓址遺跡はがまん湖遺跡の範囲の中にあって、先に記した弥生時代の住居址群や、古墳時代末の窯址遺構から、北方に位置し、東南に向けた斜面に所在した。この斜面は30°強の傾斜で、標高345m付近から尾根上345mの間に、横方向45mに広がって存在した。平地から比高差は22mほどである。

この遺跡の発見の端緒は、前々からここに五輪塔などが、出土することが知られ、地元にお住まいの金井調査団長の指摘があった。さらに1990年に、草間区誌編集委員会の調査



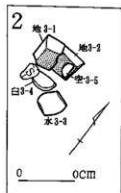
第10图 1号墓址・西山中世墓址位置图



第11圖 タビ社実測図

によると、草間区内の五輪塔の部材は、総計107個を確認（「草間のあゆみ」(1991)し、空風31、火輪29、水輪9、地輪28の内容であった。

91年にこの遺跡地の採土工事に先立って、木材の伐採と、搬出が行われ、この作業道から五輪塔の部材が出土し、空風輪2、火輪2、水輪1、地輪12、合計17個が、表面採集されている。このような発見と、高速道の採土工事によって、この遺跡が破壊されることが、確定したことなどから、92年に記録保存の発掘調査が、保護協議で決まった。さらに、同年尾根の一部が、採土工事で削られて、五輪塔の部材が出土した。このような経



第12図 第1群支群2突奥回
過から93年に、発掘調査が行われることになった。

さらにこの墓地遺跡の裾部に転落した、五輪塔の部材があり、そこの宅地造成工事が、発掘調査と並行して行われた。そこで造成地で出土した、五輪塔の部材を採集し、さらに弥生時代から平安時代にかけて、土器などの遺物が出土したため、合わせて採集した。しかし遺構の確認は、明確にはできなかった。

この中世墓址遺跡の調査で、遺構の見られた範囲は、約1,152㎡である。

この斜面に段をつくって墓を造成し、火葬址（ダビ址）は墓群の周りで検出された。この墓群の段の横線を重くみて、V群に大別した。さらにその中に支群を設定して、同族・家族などの墓が、抽出が可能かどうか、検討することとした。

1群 (1) 1号火葬（ダビ）址（11図1）は、斜面に縦方向に長径110cm、短径55cm、高さ確認面から16cmの深さの規模で、壁は赤く焼け、北側に長径18cm、短径13cmの石を最大に5個の石があり、下と周りに炭がみられた。南側にも長径28cm、短径15cmの石があり、焼骨が壁際に残っていた。この焼骨片は壙内全体にもみられ、完全に拾骨されたとは言いがたい状態であった。

石は棺台であり、燃焼をたすけるためのロストルの役目を果たしていたと思われ、この遺跡で、検出された3例とも同様と理解される。

(2) 2号火葬（ダビ）址（11図3）は、1号火葬（ダビ）址の西方やや上であり、方向も同じであった。規模は長径123cm、短径50cm、深さ10cmで、径10～20cmの石が3個北側に並び、中に1個あって南に2個並んでいた。さらに中央西に灰原が幅約30cm、長さ110cmに互って存在した。ここでの焼骨の遺存は少なかった。

3号の火葬（ダビ）址はこの2例より離れた位置にあるが、この2例が示す位置関係は、墓址群の東下であり、伝龍徳寺跡・草間館跡・村落の位置からこの墓址群に至る通路に当たっており、寺跡との関係が注目される。

このほか、この群では土師器破片・内耳土器破片・空風輪1・火輪1・水輪1・地輪

1・石臼(上)1、火葬骨埋葬1の検出があったが、五輪塔の部材は、転落した様相を示していた。

II群(第13・14図) この西山中世墓址群の火葬骨埋葬箇所は、直径13cm前後のほぼ円形の平面で、深さは20-30cmの小形土壇であった。骨蔵器の例も内耳土器破片と、上師器甕が推定されるほかは、埋納容器は検出さ

れず、紙・布・木などの容器に納められたか、直接に河原の小石で囲った中に入れて埋葬されたと推定されるものであった。II群では、この火葬骨埋葬箇所が、10箇所まとまって存在し、1箇所はやや離れた位置にあった。

この火葬骨埋葬箇所は、上あるいはそばに、墓標が伴わないのが特徴で、後に記す例からも転落したとは、考えにくいと思われる。

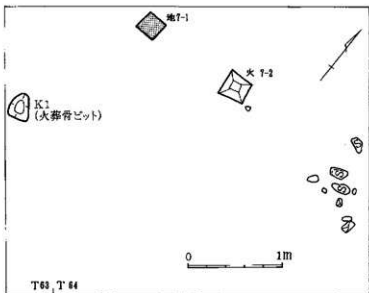
この群からは、空風輪破片1・火輪2・水輪2・地輪1・須恵器破片1が検出され、火輪2個は重なって存在した。この部材も原位置を保たず、転落した様相を示していた。

III群 この墓址群の主要部をなすところである。

(1) 3号火葬(ダビ)址(11図2) この群の東側に傾斜面に向かってあり、長径170cm、短径70cmの大きさである。この中に炭、径15cm前後の石、一辺25cmの地輪などがあり、床が焼けていた。そばに空・風輪、地輪があったが移動したものとみられる。

(2) 支群7(第15図) 地輪(32-1)を中心にして、周囲に玉砂利を一辺約150cmの方形に敷いている。この前に右皿状に加工した河原石を据えていた。この石は、底部が貫通した状態のものだった(第38図4)。この東1mの位置にも地輪(32-2)があったが、この周りからは玉砂利は検出されなかった。この敷砂利の北側に上部に3箇所火葬骨(32-4・5・8)があり、他は砂利層の下にあった(32-1~3・6・7・9・20)があり、(32-6・20)は地輪(31-1)の下に存在した。これらの西に連なって(32-11~16)が存在した。この中には(32-17)のごとく5cm内外の円礫で、直径20cmほどに丸く囲んだ中に火葬骨を納骨した例もあった。

(3) 支群8(第16図) ここから検出されたものは、空・風輪(40-2)、火輪(33-



第13図 第II群支群4実測図

5



S81+
T82

S82+
T83



◎ 水9-2



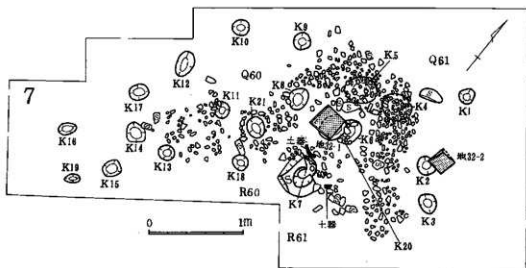
T81+

T83+



0 ————— 1m

第14图 第II群支群5实测图



第15図 第三群支群7実測図

1・40 1)、水輪 (33-2・34-1) で、火葬骨は3箇所検出されている。

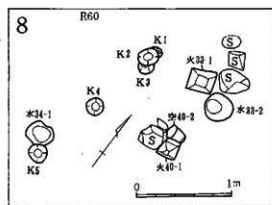
この五輪塔の部材は、IV群あるいは、V群からの転落と見られる。

(4) 支群9-1 (第17図) ここは木材搬出の作業道の下にあって、深く埋まっていた。縦2m、横80cmのV字状の溝の中に、火輪 (41-2~7) 6個、水輪 (35 1・41-1) 2個が雑然と埋まり、埋没は人為的になされた状態を示していた。この中には水輪 (41-7) のように後出的とみられる形式のものが含まれていた。

このように火葬骨2基との関連は、薄いとみられる。

(5) 支群9-2 火輪 (35-2・3) の2個が接して検出されたが、これは上部より転落したものと推定される。

IV群 支群10 (第18図) ここは空・風輪 (30 3・7)、水輪 (30-4)、地輪 (30-1・2・5・6) が集中し、地輪 (43) が3.2m東に離れて存在した。これらの地輪は傾斜



第16図 第三群支群8実測図

のため、傾いているものが多かったが、ほぼ原位置を保っていると推定される。

これらの地輪の下、あるいは周りから火葬骨が9基と、離れた地輪 (43) の周りには2基があった。ただしこの間は作業道のため、破壊された状態もみられた。この火葬骨 (10-3) からは、大膳通宝・大豊通宝・嘉祐?通宝3枚が付着して検出され、火葬骨 (10-9) からは政和通宝・大観?通?宝の2枚が発見され、これらは火

中した痕跡をとどめていた。

11支群(19図) この中心部には吉岡編年VI期の底部の欠けた珠洲焼の甕(第29図3)が埋設され、この中に中世十師器のかわらけ(第28図2)と玉石が埋まっていた。この玉石はこの周囲、おもに前方に存在したものと同じで、この甕の中からは、火葬骨は検出されなかった。この西部にある空・風輪(27-1・2・3)は移動したものである。この上部には西から地輪(31-5)、(31-1)、(31-3)、空・風輪(31-4)、水輪(31-2)、地輪(16・1・2)があり、これらもほぼ原位置を保っていたと推定される。空・風輪(29)は転落したもので、その上から刀子(同図1)1個が検出されている。

この珠洲焼の周囲からは火葬骨が38基検出され、上下関係にあるもの、地輪の下にあるもの、玉石を巡らすもの、小振りの玉石のみられるものなどがあつた。六道銭の伴うものは、火葬骨ビット(11-9)嘉祐通宝、同(11-16)銭名不明、同(11-27)銭名不明、同(11-37)皇?宗通?宝・政和通宝2枚の4例があつた。同(11-35)からは摩耗の進まない歯牙のついた顎骨が検出されている。

12支群(第20図) この西は山壁の転換点にあたり、墓域の西限をなしていた。この火葬骨の集中した地点を12支群とした。ここでは地輪(25-1)、(23-1・2)、(26-4)、水輪(26-2)、火輪(26-5)、空・風(26-3)、水輪(26-1)、水輪(25-2)、地輪(32)が散在していた。凝灰岩の地輪(25-1)の周囲には、10~20cmの玉石が多く見られ、下から火葬骨が検出され、この中に底の欠いた土師質土器の甕(第29図2)が埋まっていた。また五輪塔の部材の内、地輪はほぼ原位置を保っていたと推定される。

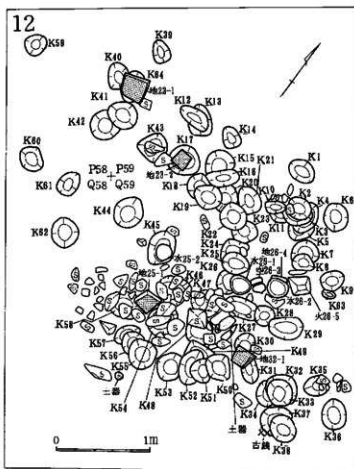
この遺跡で唯一の五輪塔の組み合わせ残存例は、この支群の空・風輪(26-3)、火輪(26-5)、水輪(26-2)、地輪(26-4)の組み合わせで、前に直径22cm、短径11cm、厚さ3cmの平板石を据えていた。

火葬骨は54基検出され、前例と同じく地輪の下や、上下に重なって検出され、火葬骨(12-10)のごとく2体分と思われる埋葬例もあつた。

第V群13支群(第23図) この支群は五輪塔の部材の発見は少なく、空・風輪(12-4・5)、(13-2破片)、(13-6)、(17-1・2同体)、火輪(13-1)、(17-3)、水輪(12-2)、(15)、地輪(12-1)、(13-5)、(17-4破片)などで、ほぼ原位置を保っているのは、地輪だけと思われ、部材は小型のものである。ここは頂部に近く傾斜が急なため、あるいは転落も考慮される。

火葬骨は36基検出された。これは等高線に沿って最高5列にあり上下関係のものもあつた。さらに傾斜のため、斜面に斜めに据って埋設したものもあつた。また、玉石などの施設はみられず、火葬埋葬墓が多い傾向の区域である。

14支群(第24図) ここは13支群の西方山壁の西に位置し、水輪(22-2)、地輪(22-1)があつて組み合い、他は不明である。火葬骨は4基で、散在している。このうち六道

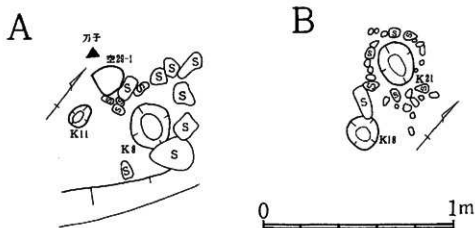


第20図 第IV群支群12実測図

銭の伴ったのは、火葬ビット
(14-3)で焼損のため、2
枚は銭種名で不明であつ
た。また、ここの土中から検
出されたもう1枚の古銭
は、腐食がはげしかったた
め、古銭表からは除いてあ
る。

15支群(第25図) この部
分は1992年10月採土事業に
よって、遺構が露出し、緊急
に調査した所である。従つて
五輪塔の部材は転落?し、そ
の中の一つは、空・風輪(表
採5)と推定される。

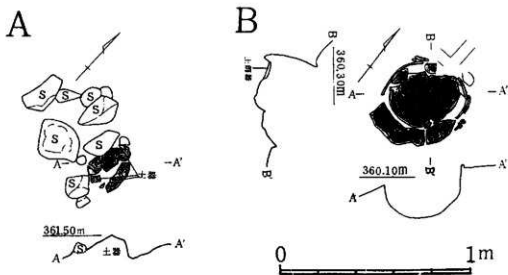
火葬骨ビットは8基見ら
れ、火葬骨ビット(15-4・
8・7)と同(15-5・3・
6)と同(15-1・2)に3
細別されると思われる。前の
2者は365~6mラインに、
後のものは367.5mラインに



第21図 圓み石ビット検出図

ならんでおり、両者の間は、平面で3m離れていた。これはほとんど以前の地形の頂部に、近い位置である。

16支群（第26図） この群は、墓址群の東下方にあって、グピ址2基と隣接しており、縦方向に並ぶ小石群と、内耳土器（第29図1）と、器種が特定できない、土師器の破片などが検出された。内耳土器は、蔵骨器と使用される例がみられるため、群として特定した。



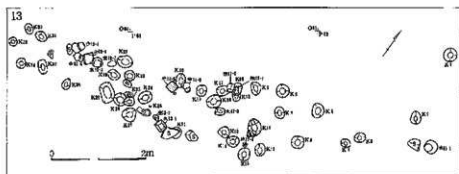
第22図 蔵骨器検出図

(2) 遺物

1) 金属器

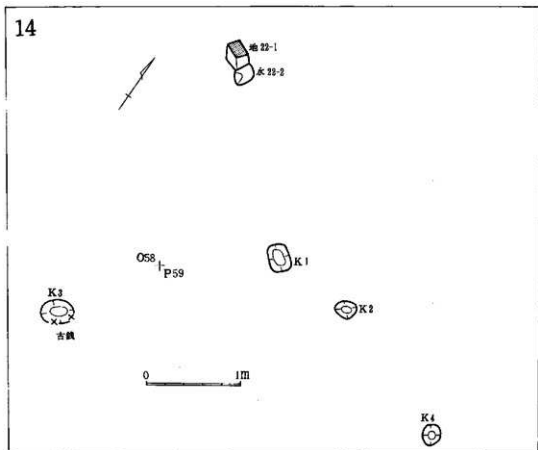
1 古銭（第27図） 検出された古銭は、銭種名不明のものを除いて、中国銭で、南宗銭度？元通宝1枚を除いてほかは、北宗銭である。铸造年代は、1010年代から1110年代のほぼ1世紀の間に収まるものである。

また銭種名不明のものは模鑄銭の可能性はあるが、すべて火中しているため特定は困難



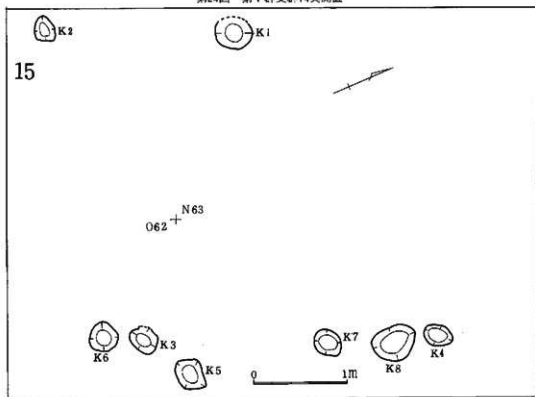
第23図 第V群支群13実測図

14

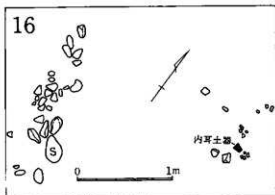


第24图 第V群支群14実測図

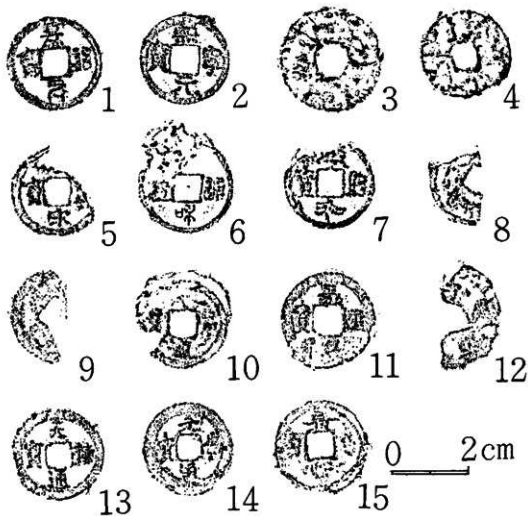
15



第25图 第V群支群15実測図



第26图 第I群支群16发掘图



第27图 古钱拓影图

第4表 西山中世墓址出土古銭表

番号	出土位置	銭種	書体	鑄造年	国	残存	備考
27-1	12-K37	景祐元宝	篆	1034(始)	北宗	完	
27-2	"	熙寧元宝	真	(1068-1077)鑄	"	"	
27-3	14-K3	不 明				"	
27-4	14-K3	"				"	
27-5	11-K37	皇宗通宝	真	1039(始)	北宗	3/5	
27-6	"	政和通宝	篆	(1111~1117)鑄	北宗	"	(味・和)
27-7	10-K4	"	真	"	"	"	
27-8	"	大觀通宝	"	1107(始)	"	1/4	
27-9	10-K1	皇宗通宝	篆	1039(始)	"	1/2	
27-10	11-K16	慶元通宝	真?	1195(始)	南宗	2枚付着	1枚銭種不明
27-11	11-K9	嘉祐通宝	篆	1056(始)	北宗	完	
27-12	11-K27	不 明				1/2	
27-13	11-K2	天禧通宝	真	(1017~1021)鑄	"	完	13・14・15付着
27-14	"	元豊通宝	行	1078(始)	"	"	"
27-15	"	嘉祐通宝	真	1056(始)	"	"	"

である。

この六道銭の埋納は最高1基に3枚で、火葬前に副葬されたため、枚数は不確定である。その副葬割合は、火葬伴埋葬202基にたいして、9例で22.3%である。

2 刀子(第28図1) この刀子は11支群から検出されたもので、残存する長さ16.5cm、最大幅1.4cmで、残存部には刃がみられ、やや内湾し、鑄はなく、平棟作りである。鋨は円みがあり、先端から2cmの位置に、鋭利ものでつけられた深さ3mmの瑕がある。

思うに土中していた割には腐食が進まず、保存が良く鍛造品とおもわれる。

2) 土 器

1 珠洲甕(第29図3) 11支群の中央に据えられていたもので、口縁部の破片は細かく層に分かれて散っていた。口径36cm、推定高さ39.5cmの法量である。表面は水平に近い叩き目があり、内部は良くナデられている。口縁部は厚く端部は円く、焼成はやや軟質である。

この甕は吉岡編年VI期(珠洲焼資料館『珠洲の名陶』1998)15世紀後半の所産と推定される。この類例は市内の高梨氏館跡出土品などにみられるが、能登半島産であるかは、確定できない。

2 土師質甕(第29図2) 11支群西で検出された、糸切り底でロクロ成型である。この

素焼きの甕は上部は失われている。底部は焼成後穿孔され、検出時は底部が上であったが、欠かれているところを見ると、蔵骨器としての使用が考えられる。

3 かわらけ(第28図2) 直径9cm、高さ2.5cmの少量で、白黄色を呈するかわらけで、糸切り底である。口縁に灯芯の燃焼痕が2箇所みられる。

これは珠洲藩の中から検出されたもので、同時期に使用されたものと見られる。この地方のかわらけ(中世土師器)の編年からみて16世紀の所産とみられる。

4 内耳土器(第29図1) これは築城群の東南下方16から検出されたもので、他の土師器の甕・環などの破片と一緒に検出された。埋没は浅く石などと交じっていた。推定口径28.5cmの通有品である。ロクロ成型、砂粒の多い器壁で、色調は明黄褐色を呈し、外面に火熱痕がある。

この土器は破片であり、検出の時火葬骨など伴わなかったが、周辺的环境から蔵骨器として使用された可能性が極めて高い。

3) その他石製品(第38図)

1 石 臼

① 上石(第38図1)は、支群2から検出されたもので、黒雲母が斑状に見られる安山岩製で、大きさは直径30cm、残存の厚さは10cmである。物入れ(供給孔)は直径3.5cmで、挽き木の孔は、四角で1辺2.1cmで奥行き4.3cmを測り、奥が細くなっている。

磨り面は、主溝が6本、副溝が6本で、六分画六溝式と呼ばれるもので、中心に軸受けの孔がある。

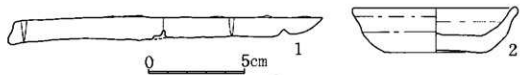
この石臼の文化圏は、近畿圏の八分画、関東及び九州の六分画に大きく分けられる(三輪茂雄『粉の文化史—石臼からハイテクノロジーまで』)といわれている。

この著書には伊那の高遠の石丁の移動と、石臼の関係、五輪塔の白石に使われている石臼のことが報告されており、死者の生前の愛用品だったかと、記されている。そしてこの時代は、まだ石臼は貴重品で、一般には広く普及していなかったと言われている。

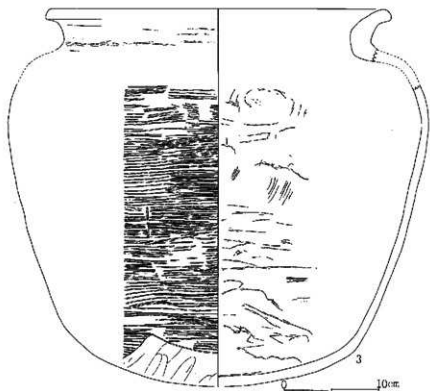
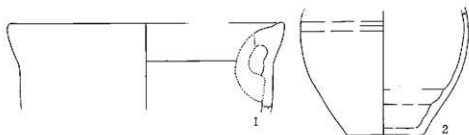
② 下石(同図2)調査地下方から表面採集されたものである。これも黒雲母の斑状にみられる安山岩製で、青灰色を呈している。直径32.2cm、高さ17.5cmを測り、磨面が摩滅して、分画の溝が消えている。中央の軸穴は、円形で直径2.4cm、長さ3.7cmを計測し、下石の厚さ15cmが残存する。接地面が中央で2.7cm凹んでいる。形式は、六分画六溝式と推定される。

③ 下石(同図3)は表面採集されたもので、半分欠けている。石英の多い安山岩製で、直径32cm、厚さ11.4cm、高さ12.7cmを計測する。下石で、下面の中央が凸状に、7cm程凹んでいる。これも磨面が摩滅しているが、六分画と推定される。

④ 供花台石(同図4)は支群7の地輪32-1の前から検出されたもので、発見された位置と、形状からこのように命名した。石英の多い淡い琥珀色した、安山岩の扁平な河原石



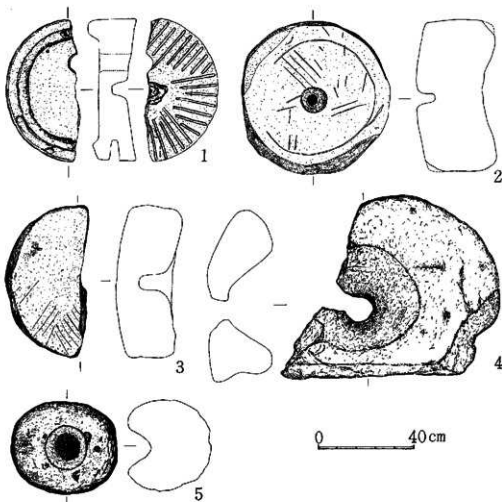
第28図 刀子・かわらけ実測図



第29図 土器実測図

第5表 西山中世墓址出土遺物観察表

図版番号	器形	寸法(cm)			色調		成形・調整	形態の特徴	系統など	残存
		口径 (刀幅)	底径 (長さ)	器高	内面	外面				
28-1	刀子	1.1	16.6				欵製・柄部まで	刃あり		9/10
28-2	かわらけ	8.8	5.4	2.4	白黄褐色	白黄褐色	糸切底 ロクロなで			9/10
29-1	内耳土器	(28.5)			明黄褐色	明黄褐色	ロクロ 砂粒多し 外面火熱痕			口縁 1/10
29-2	甕	—	8.2		白褐色	赤褐色 黒色	糸切底 ロクロ整形	壺	土師質	3/5
29-3	甕	35.0	27.0	(39.7)	明青灰色	明青灰色	外面タキヨ 内面ナア	明青灰色	珠洲系	8/10



第38図 石製品実測図

群支群	遺構	遺物																	
		大塚台 (グビ場)	大塚台 (塚跡)	石造物(瓦輪塔)						金属器		土器							
				空風輪	大輪	水輪	地輪	その他	古銭	刀子	その他	珠面鏡	土師質鏡	かわかけ	石臼	内耳土器			
4	10	10	2		1	5				3									
	11	41	5		1	5				8	1		1			1			
	12	64	1	1	3	4				2						1			
	小計	115	8	1	5	4				13	1		1			2			
5	13	36	6	3	2	3													
	14	4				1				2									
	15	8																	
	小計	48	6	3	3	4				2									
表	深		17	9	18	19	くほみ石												2
合	計	3	202	36	28	32	45	2	15	1			1			2	3		1

第3節 考察

小結 西山中世墓址遺跡について

1 選地について

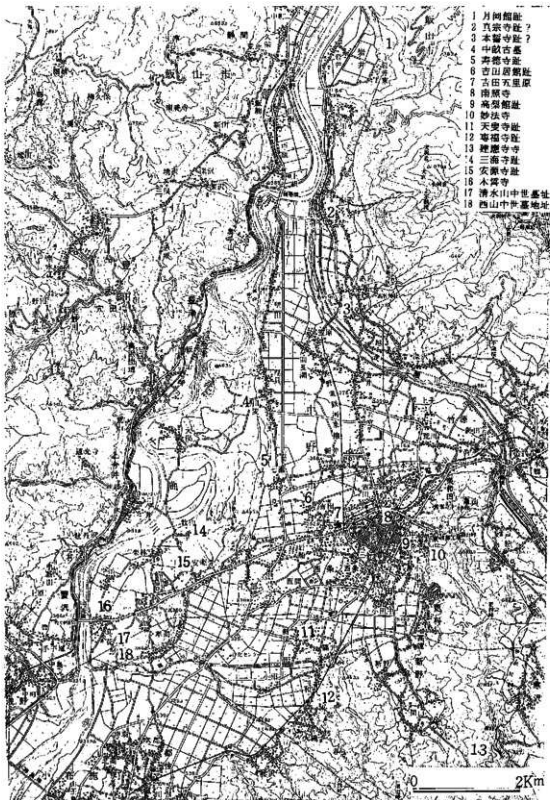
すでに述べてきたように、この草間西山中世墓地遺跡は丘陵の東南に向けた丘頂部から斜面に位置し、右手に千曲川が広がり、足下には延徳低湿地から流れる篠井川が流れ、しばらくして千曲川に合流している。

前方の左手に草間の集落があり、龍徳寺跡と伝えられる所が左下方にあり、中世には草堂が存在したと想像される。その東にはやや離れて草間氏の後期の居館と伝えられる館跡がある。

しかし短絡的に、この草間氏との関係を強調することは、躊躇をおぼえる。なぜならば前(南)方には小布施扇状地の集落が、広がっているからである。

このように中世の墓地は、南斜面に多く、「後に山を負い左右に丘陵をもち、全面に平地の流水を臨み、藏風得水に適する位置で、これは直接人生の吉凶を左右する信仰として、強く人々の心に触れていた、陰陽五行説から発した、風水思想に基づく、選地ではないだろうか」(斎藤 1985)。このように述べられている風景が、西山中世墓地に、すべて適合する。

初期仏教文化の影響から8世紀代には、火葬墳墓の風習が開始され、9世紀から11世紀には、中部地方全域に普及した(渡部 1984)。しかし古い火葬墓には、平地に営まれた例



第39図 中野市の中世墓関係遺跡位置図

があり、中野市内では吉田宮脇例がある。これは地下1mから発見されたもので、骨蔵器は土師甕と、蓋は坏が使われていた。この土器から營造年代は、平安中期とみられている(金井 1964)。

造墓の遺地は、全国的には丘陵の南斜面、その先端、次に東斜面が多いと指摘されている。この地域でも一般の傾向として平地の墓地より死者の生前の居住地を見下ろす高所に、墓地が営まれることが多いのは、現在までつづく造墓思想のようである。

同時に別の報告書で報告されている立ヶ花の清水山中世墓地は、ここより奥まった小丘の南斜面にあった。この墓地はこの西山中世墓地より先行する要素がみとめられる。しかし近距離にあるため、両者の関係はどうなるのか、被葬者の集団の居住地の問題もからめて複雑であり、これらの関連も考慮しながら考察を進めたい。

2 墓地の形成と廃絶について

つぎにこの草間西山中世墓地がいつ頃形成され、最盛期はいつか、廃絶され遺跡化したのはいつか、各地の事例と、中野市内の例をあわせて、考えて行きたい。

この西山中世墓地は、総べて火葬墓である。土葬墓は調査地からは、検出されていない。しかし安源寺遺跡からは、発見されている(中野市教委『安源寺』I 1967)。これには、西向側臥屈葬の方形箱型棺が使われており、六道銭も12枚埋納されていた。これらのことから、この墓の営まれたのは、各地の調査例から15世紀後半の年代があたえられている。

このようにこの地域でも中世において、墓制に違いが見られるが、清水山中世墓地と同じく、西山墓址群が火葬墓に、統一されていることは、集団における宗教的な規制が、働いているとみたい。

近年の全国の中世墓地の発掘事例をみると、13世紀からはじまって、16世紀に廃絶している例が多く、この地域でも同様とみられる。連続して17世紀以降も中野市内で、惣墓として形成し、存続している例はみられない。

13世紀の造墓とおもわれるのは、田麦中畝3・4・5号古墓である(中野市教委『七瀬古墳群・田麦中畝古墳群』1989)。3号墓は一辺3.5mの方形で、緑石に区画された塚墓である。4号墓は一辺6.5mの方形土盛の塚墓で、これらの類例は、静岡県磐田市一の谷中世墳墓群(山崎 1993)では、主として13世紀から14世紀に築造され、一部は12世紀に入るものが、あるだろうとされ、集石墓もほぼ同時期に、出現したとされている。

この西山中世墓地は、推定総高50~100cmの小型組み合わせ五輪塔が造立されている。

五輪塔の起源はさておいて、南北朝以前は、大型の五輪塔が造立され、15世紀後半から小型化してくるとされている。この西山中世墓地の発掘した調査区では、地輪はほぼ現位置を保っていたと推定され、26基検出されている。下方の中間に、未調査区を残しているが、その下の宅地造成地と、発掘調査以前に、表面採集された地輪が19基で、地輪合計45基が発見されている(第9表)。

これに対して、火葬埋葬骨は202基検出されている。前述の事情により絶対的数値とは言いがたいが、埋葬4.5基に対して五輪塔1基の割合となる。

しかしこの墓址群の被葬者を武士または、名主層の家族墓とした場合、墓群の継続年代が問題となる。この西山中世墓地の中心部は、7・10・12支群とした地点である。このうち11・12・7支群を検討してみると、11支群は、中心部に吉岡編年VI期、15世紀後半の珠洲壘が、火葬骨はみられずかわらけのに入った状態で埋められ、供花用などの用途が推定されている。このまわりには直径8cm前後の円礫がみられ、地輪はこの壘の左右と背後に5基ある。火葬埋葬骨は、周囲から41基が検出され、埋葬骨K9～12・K18の周囲には、2群の小玉礫敷がみられた。このほかに古銭が8枚、刀子1振が周囲から検出されている。このような地輪を巡るまともに、やや墓制に違いがみられるほか、上下に埋葬されたものもあった。

11支群を一つの家系の墓とみた場合、仮に一世代20年に1基づつ、供養の五輪塔を建立したと考えた場合、80～100年の経過が想定される。

12支群では、中心部にある集石は傾斜のため、形が崩れている。ここの火葬骨は64基で、地輪が4基検出されている。このほか底が欠かれた土師質の甕と、古銭が発見されている。ここはさらに埋葬の上下関係が複雑で、廃絶した家系の墓に、新たに墓が構築されたとの見解もできる。またこの西山中世墓址群で検出された凝灰岩製の五輪塔の部材は、破片となったものを除いて水輪1、地輪2があり、この玉石で囲まれた、地輪25-1は同種(写真41・42)で、白灰色で軟質である。凝灰岩は加工しやすいため、平安時代から塔石に使用されており、この地方でも古くから墓石に、利用されたとおもわれる。

この凝灰岩は千曲川東部の火山岩地帯からは産出せず、西部の豊野町から長野市にかけて産出し、梨花凝灰岩と呼ばれている(『長野県地学図鑑』1993)。

このことから石材加工地から買得した、または、居住地の変更にともなって移動したものと考えることができる。

このほか地輪32-1は粗雑な安山岩で、市内の箱山産出のものと類似している。またこの墓址群の五輪塔のうち、接続して発見され、組み合わせの確率の高い五輪塔は、地輪26-4、水輪26-2、火輪26-5、空水輪26-3である(第33図(2))。この五輪塔の石材も市内産に似ており、総高55cmの小型五輪塔である。この火輪の軒端は内側に傾斜して16世紀の時代を示している。

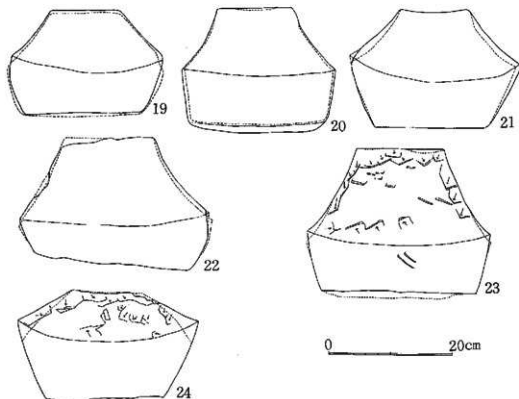
このようにこの12支群の様相をみると、廃絶墓の存在を認めれば、初現の年代は15世紀代に入るのではあるまいか。

次にIII群の7支群を検討したい。この支群のうち、注目されるのは地輪32-1を中心とする一群である。この地輪は安山岩製で一辺29cm、高さ23cmのこの墓地では大きい方である。この周囲に一辺1.3mの方形に小玉石敷がみられ、この地輪の下、敷石の上と下に火葬

埋葬骨が、敷石の範囲だけで、7基検出されている。また前方南側にすり鉢型で、底が貫通した河原石が置かれていた。これはさきの11支群で見られた珠洲甕と同様な用途をしめすものとみられ、これは「花立」または「供物台」の用途が考えられる。

この群のK21の火葬埋葬骨は、直径25cmの円形に小川礫で囲まれていた。この例は市内の安源寺遺跡4・5号火葬墓（中野市教委『安源寺』I 1967）にみられ、茶臼峯岩址遺跡の2・6号火葬墓も同事例で、この地方の中世の葬制に普遍的にみられる風習と思われる。ところでこの葬法は、集石のみられる墓とともに、「石を並べて崇り易い不運な魂の鎮魂、つまり囲いこみの所では、ないだろうか。甕りを鏝って呪で封じた所である。」（武井 1986）との一つの見解が示されており、不慮の死の魂を鎮める葬法との想定がなされている。

このような石の囲いこみが、高梨氏館跡でも見られた。この遺構は4号建物址（中野市教委『高梨氏館跡』1993）の北側にあり、礫石状の直径3～4cmの黒色の石ばかり、石を按して縦に使って、円形に並べていた。内部から遺物は、検出されなかった。ただしこの場合は、呪術にもちいられた遺構ではないかと、想定している。



第31図 火輪実測図(2)

第6表 西山中世墓址五輪塔数値整理表(火輪)

図版 番号	出土整理 番号	部材番号	石質	高さ(cm)	天端の幅	軒 幅	軒口の厚さ (長さ・中央)	軒口先の 厚さ(長さ)	備考
30-1	R59	41-3	安山岩	13.5	10.5	24.2	6.0	6.0	
30-2	表採	表16	"	15.5	8.2	20.9	5.4	6.3	
30-3	"	表15	"	12.3	10.0	20.5	3.1	3.0	
30-4	P61	13-1	"	14.2	9.3	23.0	4.4	4.2	
30-5	R59	41-5	"	15.5	12.5	(26.0)25.8	5.2	7.5	
30-6	P60	12-1	"	14.4	10.0	(23.8)23.0	(4.1)3.7	(5.4)5.0	
30-7	表採	表19	"	14.0	14.5	22.3	7.0	7.0	
30-8	"	表61	"	11.3	10.5	24.6	4.5	4.0	
30-9	"	表21	"	9.5	11.1	(23.4)22.8	(3.2)3.0	(5.7)5.5	
30-10	R59	41-7	"	11.0	9.6	25.2	1.7	3.6	
30-11	"	41-4	"	15.6	12.0	(27.2)26.5	7.5	(9.7)8.7	
30-12	表採	表20	"	14.2	9.0	23.3	6.3	7.2	
30-13	R61	40-1	"	(17.8)17.5	(12.3)10.2	27.2	(5.8)5.5	7.8	
30-14	R60	33-1	"	16.0	10.7	27.7	5.7	7.3	
30-15	R59	41-4	"	16.6	(9.6)7.5	22.9	7.6	10.0	
30-16	表採	表17	"	18.0	12.7	27.9	5.4	8.2	
30-17	"	表18	"	18.4	11.4	(24.7)23.5	5.5	7.5	
30-18	V65	4	"	14.3	10.2	(24.0)22.7	(5.5)5.3	(7.5)7.0	
31-19	R58	35-2	"	16.5	10.5	24.0	6.5	9.0	
31-20	R59	41-6	"	20.0	12.0	24.5	8.0	8.5	
31-21	R58	35-3	"	18.5	10.5	26.4	7.1	11.4	
31-22	表採	表60	"	20.0	(14.0)6.2	30.2	6.0	9.8	
31-23	S63	9-1	"	23.0	14.0	29.2	7.4	9.7	
31-24	T64	7-2	"	(17.4)17.1	(11.2)9.7	28.7	(9.6)9.2	13.5	

今までの例証からこの西山中世墓址は、15~16世紀にわたって営まれた墓地と、判明した。次にこの墓地の廃絶の年代について、この地方の歴史と照合して検証してみたい。

この西山中世墓地の被葬者層は「武士団・富裕農民層(名上)の地縁的紐帯で結ばれた墓地」(古井 1986)との静岡県一の谷中世墓地遺跡に対する見解と、奈良県宇陀地方の中世墓地の調査例から、「この地域に基盤をおく有力な在地武士層の同族墓・一統墓」(白石 1993)など、集落の一般農民層などの墓とするには、否定的の見解が多い。このように

規定すると「侍身分のものが村から消えた時、墓も廃絶する」(白石 1993)という結果になる。

さて、この地方の近世社会への大きな転換期は、1598(慶長3)年はじめに発せられた、秀吉による上杉景勝の会津へ移封の厳命である。これよりさき1557(弘治3)年ころ、この地方の領主高梨政頼は、武田氏のため追われ、上杉(長尾)氏を頼って、越後に亡命、家臣の草間氏などもおなじ運命にあったと思われる。以後約30年間、信濃は武田氏の領国経営が行われ、北信濃の諸士が故地に還ったのは、織田軍の侵入、武田氏の滅亡と混乱した1582(天正10)年であった。以後慶長3年までは16年間で、村々の秩序が整いかけていたところと思われる。

この会津国替えにさいして、海津・長沼両城に出された命令書には、「家中の侍は勿論、中間、小者など武家奉公人は、一人残らず連れて行け、行かないと言う者は成敗せよ、ただし田畑を持ち、年貢を負担し、検地帳に登録された百姓は、いっさい召し連れて行ってもならない。」とされている。近世社会の身分の固定、封建制度のはじまりである。

この際、先祖の墳墓の上をさらえて、携行したとの言い伝えも残されている。このように支配者層が交替し、新しい村づくりは、どのように進められたか、主のいない墳墓の荒廃が想像され、新しい村の開発、再編による墳墓の移動が想定される。このことは近世の非塔形墓標が、この西山中世墓地から、検出されなかったことから、裏付けられている。

3 被葬者の身分と葬法について

別項で述べたように、この西山中世墓址の被葬者は、武士・名主層の墓であるとしている。しかし仔細に観察すると、墓の占地に差異があり、供養の五輪塔が見られない箇所がある。これは4・5支群とした、位置の火葬埋葬骨群である。ここにも水輪・地輪がみられるが、上方から転落した様相のもので、埋葬骨との関連は、薄いものである。

この東下方には、ダビ場が2基検出され、これらから東の平地から、斜面を西方に登る墓道の存在を想定している。このように中心部の墓域に葬られない、しかし火葬されている人、それは武士階層に仕える身分からいうと、郎従・中間・小者と呼ばれる人たちの墓であるとも想定できる。しかし、戦争・犯罪など特殊な事象を秘めた人たちの墓であるかも知れない。

この西山中世墓址の火葬骨は、不完全な燃焼施設で、ダビに付されたため、骨格の部位を指摘できるものが多い。このうち、13支群K14火葬骨には左下顎が検出され、専門的な知識が乏しいため、断定できないが、臼歯は偏平で乳歯と思われる、8~10歳の年齢の遺体と推定される。更に同群K18の火葬骨には歯が残っており、この歯は小型で、幼児または女性の歯と推定している。

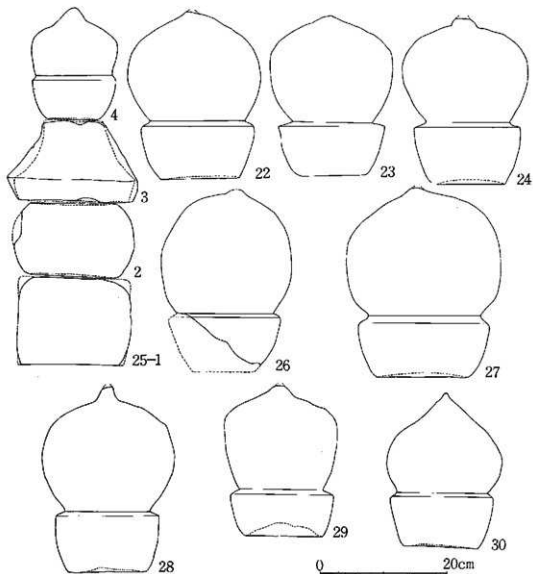
このようなことから、中心部の墓の被葬者は、武士・名主層の身分の家族墓の性格がよみとれる。そして埋葬骨と、五輪塔の数値の関係から、五輪塔の造立は、一世代における

家主または、それに準ずる人に限られる、と考えられる。

なおこの13支群からは、埋納銭が発見されていない。

4 五輪塔の形式と石材について

両山中世築地から検出された五輪塔は、石造のものだけで、下部から方形(地)・円形(水)・三角形(火)・半月形(風)・団形(空)の宇宙の生成要素の五大を表し、五つの密教の標識を現し、大日如来のシンボルとされている。古くは形が信仰の対象にされ、



第33図 空・風輪実測図(2)組み合わせ五輪塔実測図

第7表 西山中世墓址五輪塔数値整理表(空・風輪)

図版 番号	出土整理 番号	部材番号	石質	空 輪		風 輪		備 考
				高さ(cm)	最大幅	高さ	最大幅	
32-1	P60	12-3	安山岩	9.5	13.2			
32-2	R62	42-2	"	10.8	14.7	7.0	13.3	
32-3	表採	表65	"	11.3	16.1	6.0	13.1	
32-4	V65	6-1	"	12.6	16.8	7.3	15.3	
32-5	表採	表11	"	11.5	15.2	9.5	15.3	
32-6	Q61	30-3	"	13.0	17.5	7.6	15.5	
32-7	表採	表2	"	11.2	17.2	10.5	16.5	
32-8	"	表4	"	13.8	16.6	9.5	15.0	
32-9	"	表6	"	13.3	18.8	10.0	18.6	
32-10	"	表14	"	11.5	12.5	4.0	11.0	
32-11	Q59	27-3	"	13.0	16.0	6.8	14.2	
32-12	"	27-1	"	13.6	15.2	7.3	14.0	
32-13	Q60	29-1	"	13.3	15.8	8.7	15.7	
32-14	表採	表66	"	13.5	15.7	6.5	14.5	
32-15	Q60	31-4	"	16.2	18.2	7.0	14.6	
32-16	表採	表10	"	15.0	18.0	7.0	15.5	
32-17	Q59	27-2	"	14.3	17.6	7.6	16.6	
32-18	P61	13-6	"	14.8	16.8	7.1	13.7	
32-19	表採	表9	"	16.1	18.8	8.0	16.8	
32-20	"	表13	"	16.7	19.0	8.8	16.6	
32-21	P60	12-4	"	17.7	(20.2)20.0	6.9	16.4	
33-22	表採	表7	"	18.1	20.9	8.3	17.8	
33-23	Q61	30-7	"	17.6	19.3	7.8	16.7	
33-24	表採	表1	"	17.1	19.7	9.0	16.6	
33-26	"	表3	"	20.2	20.2	8.6	(17.6)13.3	2/3欠損
33-27	"	表5	"	21.4	24.0	8.6	20.4	
33-28	P60	12-5	"	21.0	20.7	9.8	16.2	
33-29	表採	表8	"	13.6	17.5	7.4	16.2	
33-30	"	表12	"	15.8	18.0	8.5	16.0	

第8表 西山中世墓址五輪塔数値整理表(一組)

図版 番号	出土整理 番号	部材番号	石質	高さ	最大幅	底 径	天輪の幅	軒 幅	軒口の厚さ		備考
									(長さ・中央)	厚さ(長さ)	
33-1	Q59	地輪26-4	安山岩	13.5	16.7						
33-2	"	水輪26-2	"	11.7	(18.8) 18.1	14.0					
33-3	"	火輪26-5	"	12.5		9.5	20.5	20.5	3.5		
33-4	"	空輪26-3 風輪26-3	"	11.4 9.2	13.5 13.1						

() は推定値

堂仏・造願の記念、死者追福のために建てられ、のち舍利塔、墓標など信仰的なものに形づけられることになった。

この五輪塔は平安中期、12世紀以後に造られ、時代によって型式に差がみられ、一般的な時代決定の指標は、火輪の軒口先の傾斜の角度が、垂直のものが古く、内側に傾斜するものは、新しいとされている。

第5表は火輪の計数値を表にしたもので、軒口の中央の厚さと、軒口先の厚さの数値が小さく、按分比に近い程、古い様相を示す率が、高いと思われる(第30図1・2)。この試案が正しければ、軒口の中央の厚さと、軒口先の厚さの数値が大きい程、新しい傾向となる(第31図21・23・24)。このなかでの多数派は、両者の差が2~3cmを示すものである。

空・風輪は鎌倉時代中・後期には、高さに比べて、横幅が広く、頂点の突起円く低い。室町時代後期になると、突起が尖り、戦国時代になると、突起が大きくなり尖ってくるにされている。この模式が正しければ、(第32図2・3・4)が古い型式を示し(第34図28)は戦国時代の型式となる。しかし全体的には、突起が破損して明確でないものが多い。

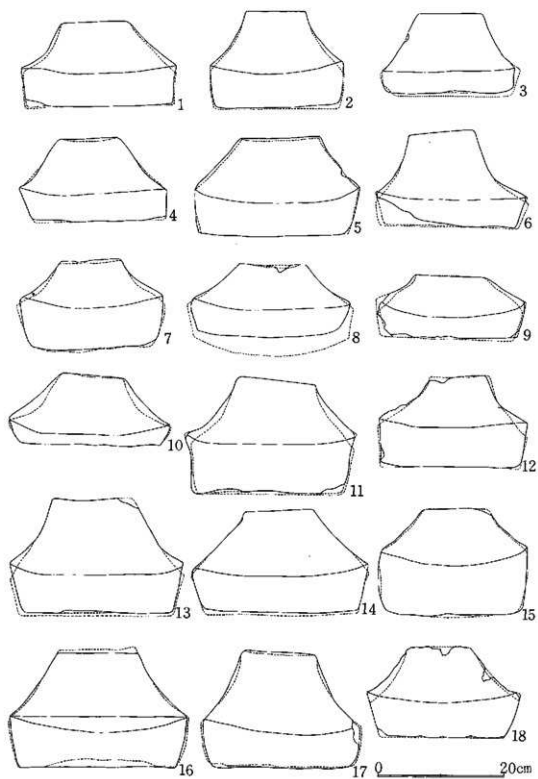
水輪は高さに比べて横幅が長く、差が大きいものが、戦国時代の型式とされている。(第34図2・4・6)などがその傾向にある。その差が少ないものが、同図14・15・18などである。しかしこの水輪の計数値による時期の決定は、少し困難と思われる。

地輪は平安時代には厚さが薄く、戦国時代のものは、正方形を示すとされている。しかし西山中世墓地から検出された地輪のうち、(第36図1)は、横幅30.5cm、厚さ12.8cmの法量で、0.16:4.23の比率を示し、表面採集されたものである。さきにもたように、古い様相を示している。つぎの形式は(第36図14)に代表される横幅24cm、厚さ15.3cmの法量で、8:5.1の比率で、これに近い数値のものがかなり多く存在する。新しいとされる正方形に近いものは、(第37図36)のような横幅16.7cm、厚さ13cmの法量で、5.5:4.3の比率のものが、前者とほぼ同数に存在する。このように再利用された可能性も否定できず、厚さの減じているものが多い。また石臼の再利用されたものもあり、時代決定に困難をきたしている。

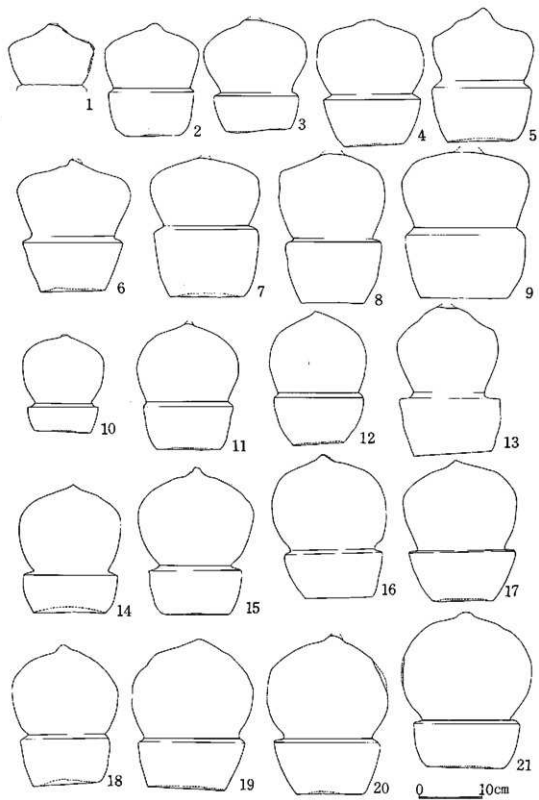
つぎに石材について記すと、西山中世墓地では、大部分は輝石安山岩の石材が使われている。この岩石は、千山川右岸の山々や、長野市の飯綱山を構成している岩石である。この安山岩には、①薄い海老色(三属性値・2.5R3/6)のもの(空風1、火1、地1)があり、②黒緑(くろつるばみ)(N-3)色の安山岩が一番多く、③緻密な組成で浅間山噴出の御代田町方面にみられるような、石材の地輪もみられる。④ついで多いのは、中野市内にも産出する、灰白色で黒雲母が混じる安山岩である。

⑤小麦色(8YR7/6)をして黒雲母のみられるものは、(地輪4、水2)があり、凝灰角礫岩と思われる。

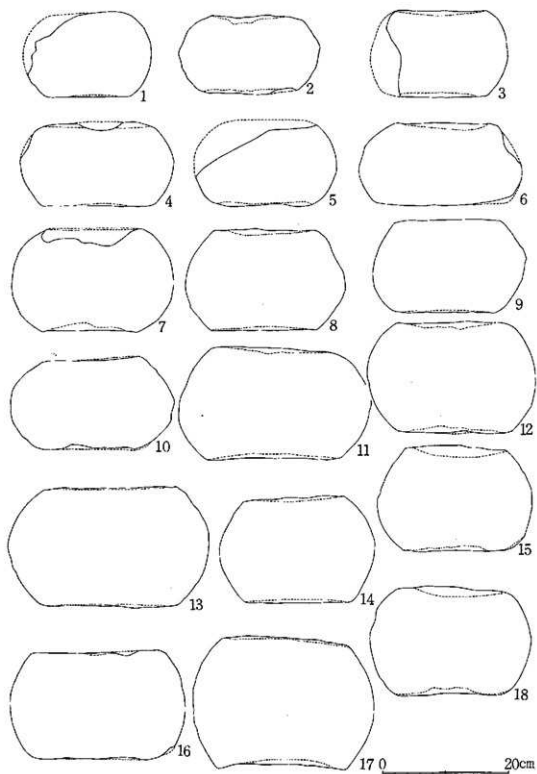
⑥灰白色(5Y9/1)の軟質な凝灰岩は、長野市から豊野町に産出し、樹花凝灰岩と呼ば



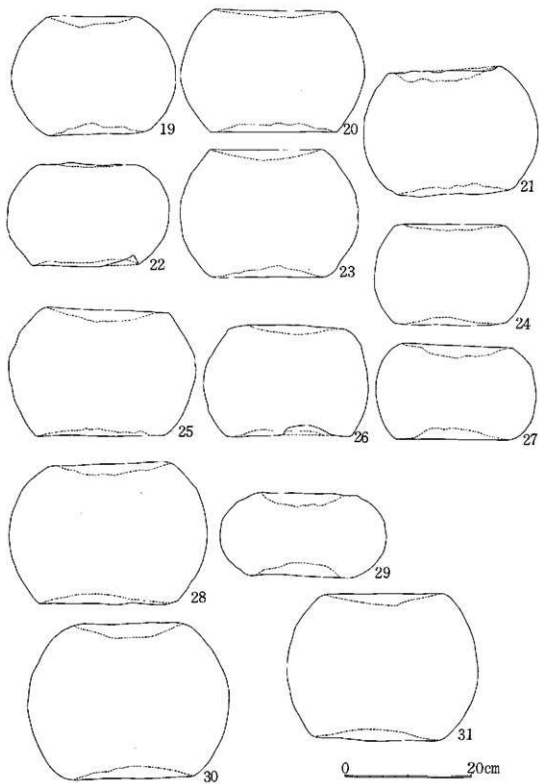
第30图 火輪実測图(1)



第32图 空・風輪美陶器(1)



第34图 水轮实测图(1)

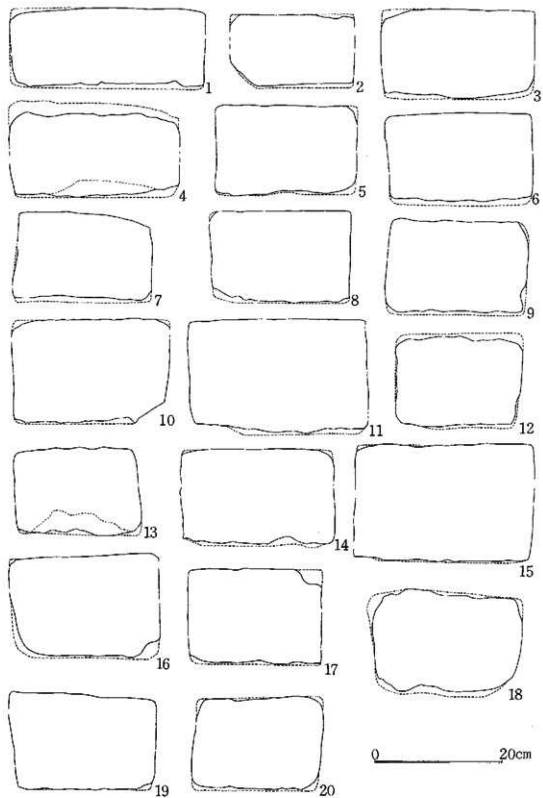


第35图 水輪実測図(2)

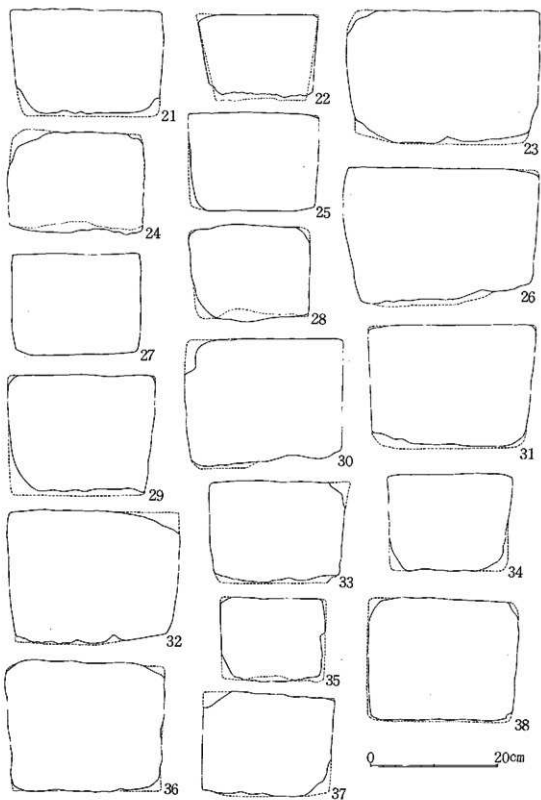
第9表 西山中世墓址五輪塔数值整理表(水輪)

図版 番号	出土整理 番号	部材番号	石 質	高 さ (cm)	最 大 幅	底 径	備 考
34-1	表探	表37	凝灰岩	13.4	(20.0)18.6	12.5	
34-2	"	表36	安山岩	12.3	22.2	13.7	
34-3	"	表35	"	13.7	(21.4)16.5	(15.5)13.5	
34-4	Q59	22-2	"	(13.3)12.0	24.1	16.7	
34-5	表探	表38	凝灰岩	(13.4)11.4	(22.5)20.5	14.8	
34-6	"	表31	安山岩	13.0	25.3	(20.3)20.5	
34-7	Q59	26-1	"	(16.1)13.8	25.5	15.0	
34-8	"	41-1	"	16.0	25.1	16.4	
34-9	表探	表25	"	14.6	23.7	16.0	
34-10	P60	12-2	"	(14.7)13.7	25.7	(17.0)16.8	
34-11	R61	33-2	"	17.5	30.3	20.5	
34-12	表探	表22	"	(17.6)17.2	26.2	18.0	
34-13	"	表29	"	18.5	31.6	20.5	
34-14	"	表28	"	16.6	24.5	15.6	
34-15	Q61	30-4	"	16.7	24.4	16.0	
34-16	表探	表32	"	17.0	27.6	19.5	
34-17	"	表26	"	20.0	28.6	20.5	
34-18	Q59	25-2	"	17.0	25.3	17.0	
35-19	R61	35-1	"	18.5	25.8	15.0	
35-20	表探	表33	"	19.2	28.9	20.0	
35-21	"	表27	"	(19.7)19.3	27.0	17.4	
35-22	"	表34	"	16.2	25.3	16.0	
35-23	P52	15-1	"	20.0	28.0	17.7	
35-24	表探	表24	"	16.0	24.0	17.0	
35-25	S62	10-2	"	19.8	29.3	20.0	
35-26	表探	表23	"	(17.4)16.5	26.0	19.5	
35-27	"	表59	"	15.0	25.0	18.2	
35-28	"	表30	"	22.0	31.2	22.0	
35-29	Q60	31-2	"	13.0	26.0	13.8	
35-30	S62	10-1	"	24.5	31.8	19.0	
35-31	U65	3-3	"	23.3	30.0	20.2	
35-32	表探	表32	"	(16.8)16.5	27.3	14.2	図未掲載

()は推定値



第36图 地轴实测图(1)

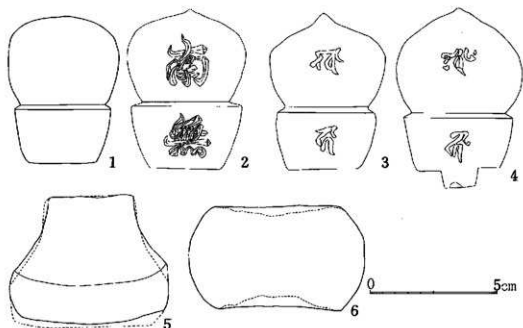


第37圖 地輪実測図(2)

第10表 西山中世墓址五輪塔数值整理表 (地輪)

図版 番号	出土整理 番号	部材番号	石 質	高 さ (cm)	幅	備 考
36-1	表探	表53	安山岩	(12.9)12.0	(30.8)30.6	
36-2	"	表55	"	(11.7)10.7	(19.7)18.5	
36-3	Q61	30-2	"	(14.3)14.1	24.1	
36-4	U65	3-2	"	(15.0)12.5	26.7	
36-5	表探	表49	"	13.5	21.8	
36-6	"	表52	"	(14.8)14.0	22.7	
36-7	"	表47	"	(14.2)13.4	21.0	
36-8	"	表43	"	14.5	21.8	
36-9	"	表57	"	(15.0)14.4	22.0	
36-10	Q61	30-6	"	16.0	24.7	
36-11	U65	3-1	"	(18.3)17.9	28.1	
36-12	表探	表51	"	14.0	19.5	
36-13	Q61	42-1	"	(13.7)13.0	19.6	
36-14	"	30-5	"	(15.3)14.8	24.2	
36-15	Q60	16-1	"	(18.4)18.0	28.1	
36-16	表探	表54	"	(16.0)15.6	(23.2)18.0	
36-17	"	表45	"	(15.2)14.7	21.2	
36-18	"	表44	"	(16.3)15.0	23.4	
36-19	Q59	25-1	"	14.7	22.8	
36-20	P61	13-5	"	(14.7)14.2	20.3	
37-21	表探	表40	"	16.3	23.4	
37-22	P59	23-2	"	(13.2)12.5	17.7	
37-23	表探	表39	"	21.0	30.0	
37-24	"	表42	"	15.5	20.4	
37-25	"	表48	"	15.6	20.0	
37-26	Q61	32-1	"	(21.7)20.7	30.2	
37-27	表探	表58	"	16.0	20.3	
37-28	Q60	31-5	"	15.2	18.7	
37-29	表探	表56	"	(19.3)18.3	22.5	
37-30	R62	31-1	"	19.4	24.8	
37-31	R61	32-2	"	(19.6)18.8	25.0	
37-32	Q61	30-1	"	21.0	26.8	
37-33	Q60	31-3	"	15.4	21.0	
37-34	P59	23-1	"	15.2	18.7	
37-35	Q59	22-1	"	13.2	16.5	
37-36	表探	表41	"	20.0	24.5	
37-37	"	表50	"	15.8	20.6	
37-38	T64	7-1	"	19.0	23.2	

() は推定値



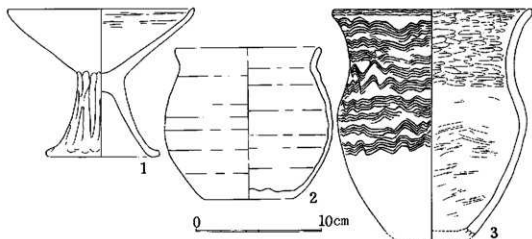
第40図 推定牛出本誓寺跡出土五輪塔実測図

第12表 推定牛出本誓寺跡出土五輪塔計測表

図版番号	器形	部材番号	石質	空 輪		風 輪		備 考
				高さ (cm)	最大幅	高さ (cm)	最大幅	
40 1	空・風輪	H27	安山岩	14.0	17.5	8.5	15.2	
40-2	"	H 2	"	14.8	19.0	10.0	17.6	
40-3	"	H 1	"	15.0	18.4	9.1	16.0	
40 4	"	H 5	"	16.7	20.0	8.0	17.3	
図版番号	器形	部材番号	石質	高さ (cm)	幅	—	—	
40-5	火輪	H35	安山岩	21.0	25.2	—	—	
40-6	水輪	H39	"	16.7	28.0	—	—	

れている。これは（地2、水1）が検出され、その他に破片となったものもあった。

このように産出地を大別すると、6箇所以上から運ばれてきたことがわかる。これは石材産地からの製品購入のほか、前にみたように墓石の移動も考慮される。



第41図 がまん洞遺跡表探土器実測図

第13表 がまん洞遺跡表探土器観察表

図版 番号	種 別	器形	寸法(センチ)			色 調		成形・調整	形態の特徴	系統など	残存
			口径	底径	器高	内面	外面				
41-1	箱清水式	高坏	15.0	9.2	11.9	赤彩	赤彩	ヘラミガキ	脚内塗彩 なし	古墳時代の 初期	
41-2	土師器	小形甕	12.6	5.6	11.5	赤褐色	赤褐色 ~褐色	ロクロ整形	堅		
41-3	箱清水式	甕	15.8	6.0	18.6	黒褐色 灰褐色	赤褐色 灰褐色	ヘラミガキ			

第IV章 上の山遺跡

(1) 遺構 (第43図)

この遺跡は、中野市草間の日和山神社北方の南向きの上段にあって、標高367m、盆地面からは、比高35mである。ここは高速自動車道建設の採土工事予定地内において、平成4(1992)年秋の試掘調査によって、黒土の落ち込みと、土器が検出された。このため西山中世墓址の調査に引き続いて、5年7月27日から8月26日まで、発掘調査を行った。

当初は、土器の存在した面に、住居址の存在を予想して発掘したが、床面の周囲いが確認できず、粘土層と黒色土が入り乱れ広がり、土器の存在や、黒色土層を追求すると、次第に発掘面積が拡大し、120㎡におよんだ。

表土の下には、鉄分の多く含んだ土があり、その下の白色粘土層20～30cmが土器製作用に、採取したものと推定され、下層には砂の含んだ層も存在した。土器はこの白色粘土層の下から多く検出され、その上層にも存在した。

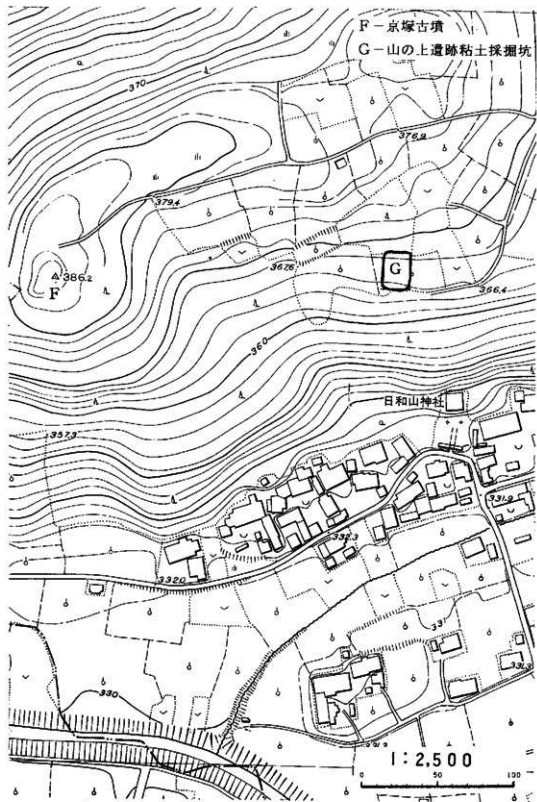
実測図には、水溜まり状の凹地がみられるが、白色粘土を採掘して、上層の不要の土を後方に廃棄したものと推定され、断面図はこのような土層堆積を示している。

(2) 遺物 (第45図)

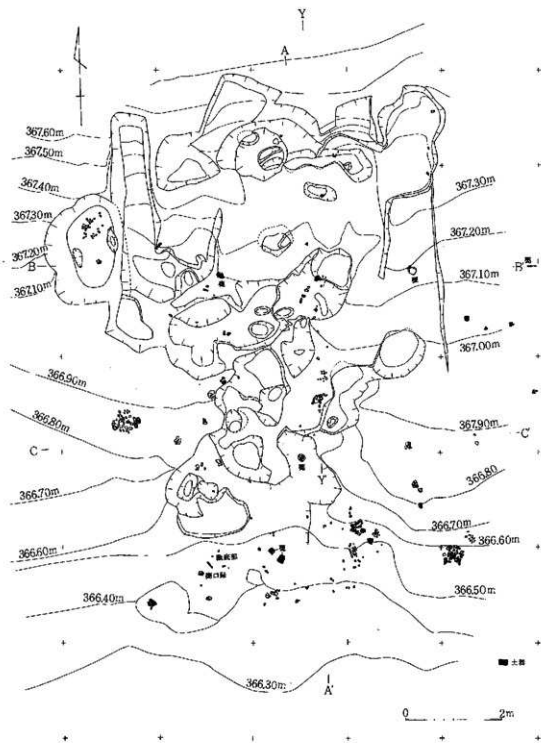
この遺構の年代を知る手掛かりは、検出された須恵器大甕の破片(第45図10)などで、平安時代の特色をもつものである。須恵器は敲打痕が表面にみられ、横ナデされた部位もあり、胎上の鉄分は、低温のため、自然釉とならず、凝結している。

このほかに、検出された土師器は、大小の甕ばかりで、ロクロで、まきあげ成型された痕跡が明瞭である。低火熱で焼成されたためか、保存が悪く器面が剥落して、観察不能である。

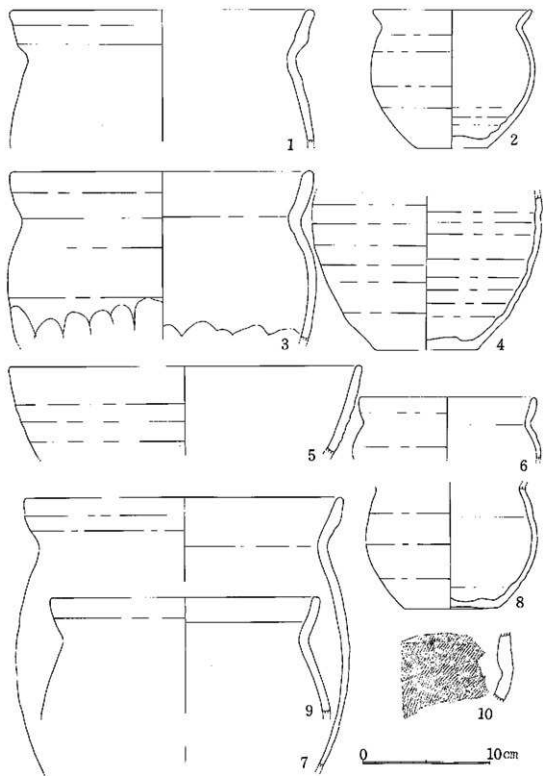
このような須恵器と土師器の甕の形式から、平安時代をⅦ期区分した中のⅢ期、10世紀前半の様相を示すものと、推定される。



第42図 上の山遺跡位置図



第43図 上の山遺跡遺構・遺物実測図



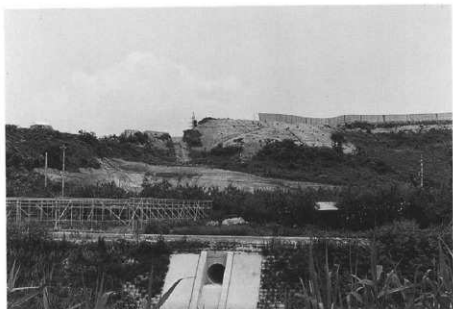
第45図 上の山遺跡出土土器・実測拓影図

第14表 上の山遺跡出土土器実測・拓影図観察表

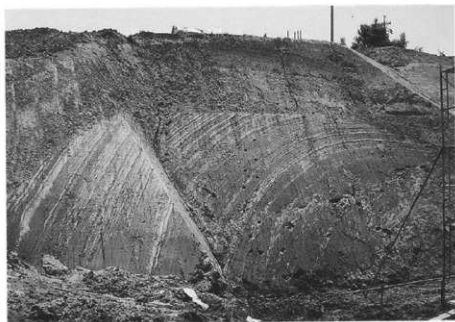
図版 番号	種別	器形	寸法(センチ)			色調		成形・調整	形態の特徴	系統など	残存
			口径	底径	器高	内面	外面				
45-1	土師器	甃	24.0			褐色	赤褐色				
45-2	"	小形甃	11.7	7.1	12.1	"	"	ロクロ整形	内底の字形	軟	4/5
45-3	"	長胴甃 (24.0)				白黄褐色	白黄褐色	"		堅	1/10
45-4	"	甃		8.0		暗赤褐色	黒褐色 暗赤褐色				1/2
45-5	土師器	鉢	(28.0)			黒褐色 暗褐色	黒褐色 暗褐色	ヘラミガミ			1/10
45-6	"	小形甃 (14.0)				赤褐色	赤褐～ 褐色				
45-7	"	長胴甃	25.3			赤褐色	赤茶褐～ 褐色	下タタキ		軟	1/3
45-8	"	小形甃		7.3		赤褐色	赤褐色	ロクロ		軟	4/5
45-9	"	長胴甃 (20.4)				"	"	ロクロ整形		軟	1/12

拓影図

45-10	須恵器	甃破片	—	—	—	灰青色	青灰色	表・敲打痕ナア 内・取き痕消す	—	—	—
-------	-----	-----	---	---	---	-----	-----	--------------------	---	---	---



1 南方から見たがまん湖遺跡全景



2 高速道工事で表れた褶曲の断面

3 南から
見たがまん
洞1号窟址



4 北から
見た灰原の
土器



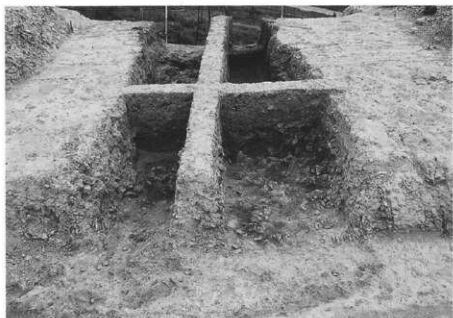
5 西から
見た灰原・
焼成部付近
の土器





6 南から見た北側の壁断面

7 南から見た中央部断面



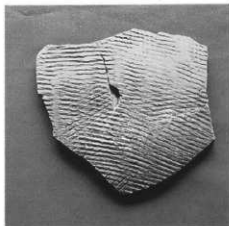
8 西から見た中央の横断面



9 東（灰原）から見た竈址全景



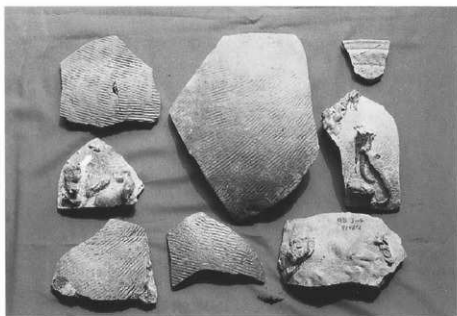
10 坏蓋・坏



11 斐破片（表）



12 同斐破片（内面）



13 須惠器破片



14 冨内面



15 西山中世墓址から見た小布施町方面



16 伝竜徳寺跡



17 南から見た墓址全景



18 西から見た墓址全景



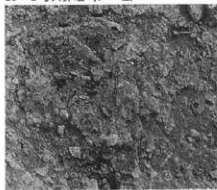
19 1号
火葬址 (ダ
ビ址)



20 2号火葬址 (ダビ址)



21 3号火葬址 (ダビ址)



22 六道
銭の検出



23 刀子の検出



24 支群11

25 支群12・
地輪 (26-4)
ほか



26 支群12・
凝灰岩の地輪
(25)



27 支群11・珠洲焼窯の検出



28 支群12・土師器の壺の検出

29 支群11・珠洲焼の壺とかわらけ





30 支群7・
上から見た地
輪(32-1)



31 支群2・水輪・地輪・石臼の検出



32 支群7・地輪(32-1)の前の
供花台石



33 支群7・石囲みの火葬骨



34 支群13・
空風輪・水輪
・火輪

35 支群11・
空風輪



36 東から見た
支群13の埋葬火
葬骨



37 南から見た支科7と11の埋葬火葬骨



38 想定復元した五輪塔

39 慰霊祭





40 出土した珠洲焼壺・かわらけ・土師器甕



41 凝灰岩の地輪



42 同上



43 出土した五輪塔の部材



44 想定復元した
組み合わせ五輪塔

45 想定復元した
組み合わせ五輪塔



46 同上



47 同上





48 南から見た上の山遺跡調査地全景



49 南から見た粘土拌搦坑



50 西から見た粘土採掘坑全景



51 西から見た粘土採掘坑の東部分



52 粘土採掘坑の断面



53 粘土採掘坑底の土器

54 同上



引用・参考文献

- 長野県国史編輯局『長野県町村誌』 1884
- 長野県町村誌刊行会『長野県町村誌』 1936
- 長野県教委『下高井』 1953
- 中野市教委『安源寺』 1967
- 金井汲次「中野市古田出土の麻骨器」『高井』11号 1969
- 信濃史料刊行会『新編・信濃史料叢書』第二巻 1972
- 田川幸生ほか「茶臼峯」-中世の營造構を中心として-『高井』30号 1974
- 中野市『中野市誌・歴史編』前編 1981
- 長野県『長野県史・考古資料編・主要遺跡・北・東信』 1982
- 金井明夫『むらの歴史』 1983
- 雄山閣『新版仏教考古学講座』3 塔・塔婆 1984
- " 7 墳墓 1984
- 同『季刊考古学』墳墓の形態とその思想 1984
- 徳山輝純『梵字手帳』 1985
- 中村浩『和泉陶邑窯の研究』 1985
- 山村宏「一の谷遺跡について」『歴史手帳』11 名著出版 1986
- 石井進「一の谷遺跡と中世都市」" 1986
- 坪之内徹「中世墳墓遺跡と一の谷墳墓群」" 1986
- 三輪茂雄『粉の文化史』-石臼からハイテクノロジーまで 1987
- 吉川弘文館『日本考古学論集』6 墳墓と経塚 1987
- 藪田嘉一郎『宝篋印塔の起源続五輪塔の起源』 1988
- 珠洲焼資料館『珠洲の名陶』 1988
- 中野市教委『七瀬古墳群・田麦中畝古墳群』 1989
- 長野県『長野県史・考古資料編・遺構・遺物』 1989
- 『角川日本地名大辞典』20 長野県 1990
- 石井進編『考古学と中世史研究』 1991
- 金井汲次「草間のあゆみ」(10) 1991
- 千々和到「中世墳墓について」中野市中央公民館レシメ 1992
- 西口寿生「土器の産地と交流」新版『古代の日本』10 『古代資料研究の方法』 1993
- 信濃毎日新聞社『長野県地学図鑑』 1993
- 白石大一郎「奈良県宇陀地方の中世墓地」

古井敏幸「中世群集墓遺跡からみた惣墓の成立」国立民俗博物館『国立民俗博物館研究報告』第49集 1993

石井進・萩原三雄編『中世社会と墳墓』 1993

あ と が き

今回のここに報告する調査は、すべて高速道路建設事業の関連に原因する、草間山の上採取事業によって、緊急発掘調査されたものである。一部整理作業の時間の不足により、割愛した部分もある。

調査経費はすべて市費負担で行われたため、当初予想したより、中世墓址の範囲は拡大し、重層的に遺構が存在したため、調査費が増大し、予算が窮屈であったが、市当局の理解を得て初期の目的が達成できた。

がまん遺跡跡1号窯址は、高丘丘陵における須恵器焼成窯の初源期のもので、古墳時代末に位置し、盛行そして、平安時代に終息する窯址群の消長を知る上で、重要な発見であった。

同遺跡内の西山中世墓址は、同年秋に行われた、同じ高速道関連事業に原因する立ヶ花の清水山中世墓址遺跡とともに、長野県における中世の集団墓地の稀有の調査例であった。中世の墓制、社会構造を知るうえで貴重な調査例といえよう。

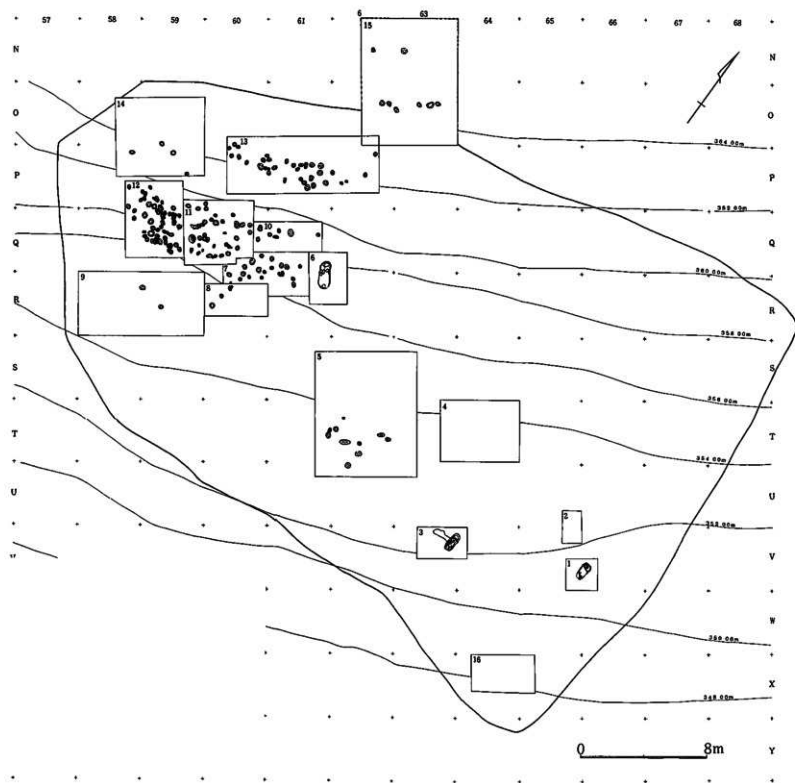
両遺跡の調査成果をみると、構築年代は清水山中世墓址が先行し、西山中世墓址と重複する部分があり、廃絶は西山中世墓址が、中世末、近世初頭と推定している。このように両遺跡が直線距離約400mの近距離にあり、南面する丘の傾斜地につくられていたことは、被葬者の居住地の特定の検証が必要である。

西山中世墓址の五輪塔は、年代が新しいと推定したものは、清水山中世墓址の古相のものより、大形である。あるいは、領主層の墓ではあるまいかと推察され、戦国時代には五輪塔が小形化するといっても、身分による階層差が現れていると考えられる。

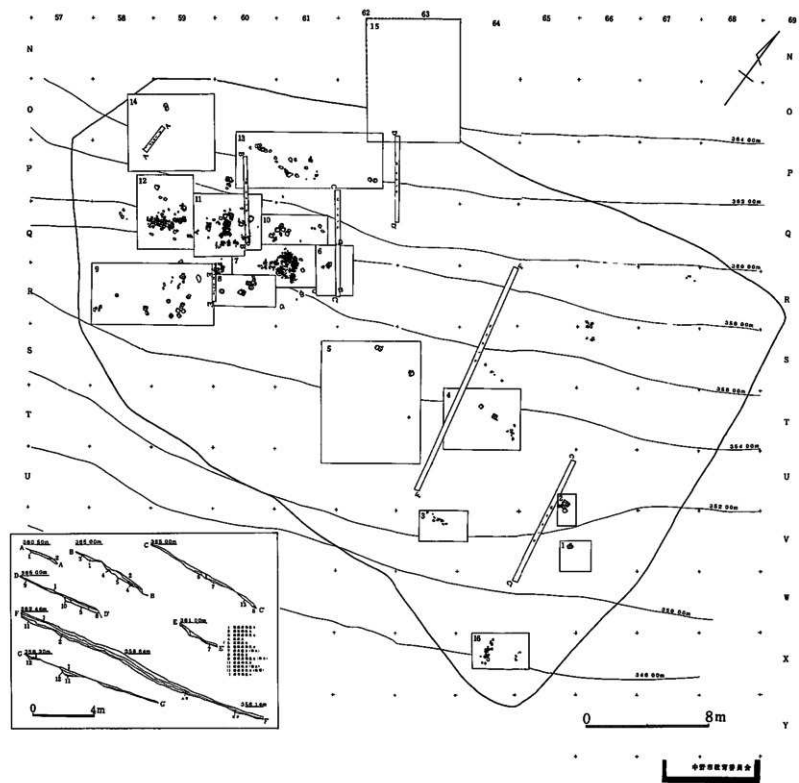
上の山遺跡の粘土探掘坑は、平安時代の土器製作に伴うもので、土器のあり方から採取者は、近郷の住人と推定したい。

このように高速道建設に伴う、埋蔵文化財調査は、他の建設事業に伴う発掘調査と重なって、中野市では、対策に追われる日々を過ごしており、立ヶ花インター開通後もしばらくこのような状態が続くものと考えられ、埋蔵文化財保護対策が、日下の急務とみられている。

(檀原長則)



付図2 西山中世基址・火葬骨ピット検出図



付図1 西山中世基址遺跡全体図

がまん洲遺跡
(西山中世墓址) **発掘調査報告書**
上の山遺跡

印 刷 平成 6 年 3 月 31 日
発 行 日 平成 6 年 3 月 31 日
編 集 ・ 発 行 中野市教育委員会
中野市三好町 1 - 3 - 19
印 刷 所 カシヨ株式会社

